

• Author •

柚本 悠斗

• illustration •

桜木 蓮

ie ni kaeru to
kanojyo ga
kanarazu nanika
shiteimasu

先行試読版

GA文庫

Prologue

プロローグ

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu

「んん……!?」

ある日の夜中。

寝苦しさに目を覚ますと同時に、思わず叫びかけて声を堪えた。

なぜなら、少しでも動けば唇が触れそうな至近距離に女の子の顔があつたから。

薄暗い中、カーテンの隙間から漏れる僅かな外の灯りが幸せそうな寝顔を照らす。

小さな顔に完璧ともいえるバランスで配置されたパート。

透き通るような白く綺麗な肌に長いまつ毛が印象的な整った顔立ちは、少女としての美しさを兼ね備えている。

そんな女の子が、俺のベッドで寝息を立てているからだ。

「……相変わらず慣れねえな。目が覚めて驚くの何度目だよ」

思わず呟きながら、溜め息が漏れる。

そう――、こんな状況は、今に始まつたことじゃない。

毎度のこととはいって、女の子が隣で寝ていてる状況はやっぱり慣れない。

完全に目が覚めてしまい、水でも飲もうと起き上がるうとした時だつた。

「ううん……」

「——!?」

彼女は可愛らしい声を上げながら、俺を捕まえるように腕にしがみ付いてきた。なんとも言えない柔らかな膨らみを押し付けられ、あまりの気持ち良さにまた声を上げそうになつてギリギリ堪える。

眠つてゐる彼女は当然、下着を着けていない。

推定Dカップ——薄手の部屋着はダイレクトに感触を伝えてくる。

少しでも動けばより感触を楽しむことができる状況で、脳内の天使と悪魔が全面戦争を繰り広げるんだが、彼女はそんな俺の葛藤なんて知る由もなく腕を抱きしめてくる。

「勘弁してくれ本当……」

僅差で理性という名の天使が勝ち、彼女の腕をそつと離す。

起こさないよう、ゆっくりと布団をめぐりベッドから降りようとした時だつた。

「ぐはつ——!?」

さすがに三度目になると声を堪えきれない。

なんと彼女の部屋着のボタンが外れていて、胸元が露わになつていた。

豊かな双丘は横になつてゐるため重力に逆らうことなく強調されている。今はギリギリ隠れ

ているが、身じろぎ一つで見えちゃいけないものが見えてしまうのは確実だろう。

パジャマのボタン同様に俺の理性が炸裂さくれつしかける。

全力で目を背け、布団を彼女に掛け直してベッドを降りた。

「可愛い上に胸も大きいとか……思春期男子にとっちゃ暴力みたいなもんだろ」

そんなことを呟きながら、部屋の隅に置いてあるウォーターサーバーの水をコップに注ぎ、

一気に飲み干して冷静さを取り戻す。

ソファーに身を投げ、思わず天井てんじょうを見上げた。

「なんでこんなことになったのか……」

そう——こんなはずじゃなかった。

いまだベッドで幸せそうな寝顔を浮かべている彼女。

その寝顔を眺めながら、今に至った経緯を振り返る。

❶ 誕生日プレゼントは美女

人生は所詮しょせん、マルチプレイではなくソロプレイだ——。

もちろん、全ての人に当てはまるのではないのかもしれない。

だが、少なくとも俺おれにとって、十六年間生きてきた末に導き出された結論である。どうだろう？ あながち間違っているとは言えないと思わないか？

どれだけ大切な友達や恋人を作つても、その関係がずっと続くとは限らない。

事実、大人たちは社会人になると学生時代の友人なんて疎遠だと口にし、運命の人だと信じて付き合つた男女がクソどうでもいい理由で別れていく。

それは家族だって同じ。いずれは自立をしなければいけないのに、親離れや子離れができず過保護やニートになつてしまつたなんて話はざらにある。

そんなものに執着して関係を維持する労力に比べたら、初めから一人であることを受け入れて生きていく方がよっぽど楽だし建設的だと思わないか？

つまり『本当に強い人間とは、一人で生きていく強さを持つ者だ——』それが俺の信条。

その考えに至り、お一人様生活を始めてから一年ちょっと。

ie ni kaeru to
kanojyo ga kanarazu
nanika shiteimasu



俺は一切の友達を作らず、ひたすら『孤独耐性』を上げることだけを考えてきた。

孤独耐性とは、俺が考える『一人で生きていく強さを表す指標』であり、あらゆるソロプレイをすることで上昇し、人と群れることで下降していくリアルのパラメータ。

可視化できないパラメータではあるが、昼夜に一人で過ごしたり、一人で帰宅することで上がり、逆に誰かに声を掛けられたり、親密になることで下がってしまう。

友達なんて作った日には、せっかく積み上げてきた耐性値がゼロになるようなもの。そうやつて孤独耐性を極めるべく過ごした日々は、とても充実していたと思う。

だつてそだろ？

クラスでのポジション争いや派閥の対立など、誰だつてその手の人間関係で悩んだことがあるはずだ。誰かの顔色を窺うよくな生活が禿げるのは語るまでもない。

一人でいれば、少なくともその手の面倒事から解放される——。

とはいえる、友達が不要だからといって周りと必要以上に距離を取る必要はなく、変に卑屈になる必要もない。一人といえど、生きて行く上で最低限のコミュニケーションは必要だ。

大切なのは、相手に期待せず、自分も期待されないこと。

相手に期待をさせれば好感度が上がる。その逆もまたしかり。

その積み重ねが友達という関係性を作り上げ、煩わしい人間関係を形成してしまう。

だが、周りの連中に対しても常にニュートラルに接していれば、やがて『仲が良くも悪くもな

い極めて普通のクラスメイト』というベストポジションを確保することができる。

そうすれば、理想とするお一人様生活への支障は最低限で済むだろう。

なんて、こんなことを言うと『友達ができないだけだろ』と笑う奴やつもいるかもしれない。だが残念。そんなことは全くない。

俺は胸を張つて『友達ができないんじゃない。作らないだけ』と言える。

理由は簡単。単純明快。

今言つた『お一人様理論』の真逆を行えば嫌でも友達ができるてしまう。そしてそれは、過去の俺が取つてきた行動そのものであり、俺自身が体現者であるからだ。

友達を作つていたからこそ、作らない方法を熟知しているにすぎない。

今にして思えば無駄な時間をしてきたと後悔しかないが、はぶられたぼっちではなく、自ら進んでぼっちでいる俺こそ『プロのぼっち』と言つても過言ではない。

そんな感じで、来週から始まる高校二年としての生活も、なに一つ変わることはない。

自称プロのぼっちとして一人で生きていく強さを身につけるべく、孤独耐性を極める日々。

ゆくゆくは独身公務員として、安定の下に定年退職を迎える気ままな老後をすごす。

それが俺の青春であり、人生設計だつたんだが……。

それはある日を境に、あつさりと終わりを告げた。

つきよのあかり月夜野朱莉が『レンタル家族』としてやつってきたあの日に――。

*

そのメールが届いたのは、春休みも終わりに近づいたある日のことだつた。

俺のお一人様生活の基盤である1LDKのアパートで、同居しているはりねずみの源太げんた（通

称・源さん）にのんびり餌をあげていた時、不意にメールの着信音が鳴り響いた。

「メール……だと？」

驚きのあまり思わず餌をあげる手がとまる。

なぜなら、俺のメールアドレスを知っている奴は誰もいないからだ。

今のご時世、友達とメールするよりメッセージアプリでやり取りする方が便利だから！　なんて理由じゃない。そもそも俺のスマホにはメッセージアプリが入っていない。

つーかさ、メッセージアプリってマジで害悪だと思わないか？

読んだ瞬間相手にバレるとか、返したくもないクソどうでもいい内容なのに、見てしまったが故になにか返さなきやいけない義務感に苛さいなまれる。既読無視なんてしたら後から『なんで返事くれなかつたの!?』と言われ、まやかしの友情に亀裂が入ること間違いなし。

俺にとつては不要な心配だが、それはともかく――。

「まさか……」

唯一心当たりのある人物の顔が頭に浮かび、慌ててメールを開く。

『誕生日おめでとう。今日着でプレゼントを送った。煮るなり焼くなり好きにしろ。父より』

「親父が今さら誕生日プレゼントだと……？」

父親とはもう一年も会っていないし連絡も取っていない。

俺が高校に入学するのを機に勤めていた外資系企業を辞め、ゆくえ行方をくらました。それ以来、何度か連絡をしたものの返事はなく、どこでなにをしているかもわからない。

どうして今さらプレゼントを……というか、誕生日は来週なんだが。

とうとう息子の誕生日も忘れたかクソ親父！

そう思つた矢先だった——部屋のインター^{ホン}が鳴り響く。

時計に目を向けると、時間はまだ朝の九時半。

親父のプレゼントを届けにきた配達業者だろう。

「源さん、ちょっと待つてくれ

餌のミルワームを源さんの前に置いて玄関に向かう。

ドアを開けると、まさかの光景が目に飛び込んだ。

「おはようございます！」

目を疑つた。

そこには、一人の美少女が笑顔で立つていた。

肩の下まで伸びたストレートの髪が風になびく。やや下がりめの大きな瞳^{ひとみ}と長いまつ毛が印象的で、浮かべている笑顔からは全てを受け入れてくれそうな優しさが窺える。

身長は百五十センチ台半ばといったところだろうか？ 春らしい薄いピンクのワンピースが身体のラインを強調していて、服の上からでもスタイルの良さが明らかだつた。

「……部屋を間違えてません？」

とても配達業者には見えず、思わず出たのはそんな言葉。

それもそうだろう。

この一年で俺の部屋を訪ねてきたのは配達業者を除けば新聞勧誘と宗教勧誘。あとは隣の部屋のカツプルが修羅場^{しゆらば}の時に、助けを求めてきたお姉さんくらい。

もしや美少女を使つた新手の勧誘か？ 違うとすればドッキリを疑いカメラを探すレベルだが、幸いドッキリを仕掛けるようなお茶目な友人はいない。

つまり、こんな美少女が俺に用事があるはずがない。

「えっと……ここ、泉ヶ丘颯人さんのお部屋ですよね？」

彼女は少し困ったような表情を浮かべながら俺の顔を覗き込む。

もはや驚愕^{きょうがく}に震えるレベル。本当に俺に用事があつてきただらしい。

「はい……俺が颯人ですが、なんの用ですか？」

警戒しながら答えると、彼女の顔にぱつと笑顔が咲いた。

「私、月夜野朱莉です！」

弾んだ声で名のり、どうしてか、少しの間があつた。

「……月夜野朱莉さん？」

思わず繰り返してみるが、心当たりはない。

「はい。今日からお世話になります。よろしくお願ひします！」

「はい？」

今なんて言つた？

「早速ですが、お邪魔しますね」

なんて考える間もなく、彼女は部屋に上がろうとする。

「ちょ、ちょっと待つてくれ！」

慌てて彼女の肩を掴んで引き留める。

「どうかされましたか？」

「どうかされましたもなにも……いきなり部屋に上がられても」

すると彼女は察したような表情を浮かべ、顔を少し赤らめて叫ぶ。

「大丈夫です！ 部屋が片付いてないとか、ちょっと女の子に見られたら困るような雑誌が



あつても気にならぬ。むしろ私、興味も理解もある方なので安心してください！」

「いやいやいや、思春期男子に理解があるのは結構なことだけど、そうじやなくて！」
動搖して揺る手の力が緩んだ瞬間だつた。

彼女は俺の手をかわして部屋に足を踏み入れる。

「あら、綺麗にされているのですね。大人な雑誌も見当たらぬ……」

なぜ後半、やや残念そうに言つたんだろうか。

「あつ！」

彼女はなにかを見つけたように声を弾ませ、それに近づいてしゃがみ込む。

「はりねずみを飼つてしているのですね。可愛い！ お名前はなんていうのですか？」

「名前？ 源太。俺は源さんて呼んでる」

「源さん。可愛い名前ですね。よろしくね、源さん」

絶賛食事中の源さんに触ろうとするが、源さんは丸まりながら針を立てて警戒モード。それでも彼女が触るとすると、源さんは完全に顔を隠してしまつた。
いや、そんなことよりも――。

「本当にちょっと待つてくれ。いきなり家に押しかけてきて、今日からお世話になりますとか……月夜野さんだっけ？ どういうことが説明してくれ」
すると彼女はきょとんとした表情を浮かべた。

いやいや、そんな顔をしたいのは俺の方なんだが。

「聞いていらっしゃいませんか？」

「だからなにを？」

「今日から私が、颯人さんのレンタル家族として一緒に暮らすことです」

「……はい？」

脳内に流れ込む情報が、一つも理解できずに抜けていく。

レンタル家族？

一緒に暮らす？ こんな美少女と俺が？

いいやいいや、なにかの間違いだろ？

「快斗さんから聞いていませんか？」

「か、快斗さんて……」

その名前に聞き覚えがないわけじゃない。

快斗——泉ヶ丘快斗。俺の親父の名前だ。

「じゃあ、月夜野さんは親父から言われてここに来たってことか？」

「はい！」

めまい
目眩がして思わず頭を抱える。

どうやら冗談ではないらしい。

どこでなにをしているかもわからない親父から、わけのわからない状況を押し付けられてい

るつてことか。あの親父らしい……相変わらず行動が読めないのは変わっていない。

「あの……本当ににも聞いていらっしゃらないのですか？」

「ああ。聞いてないどころか、親父とは一年も連絡を取つてない」

彼女は心配そうに俺の顔を覗き込む。

すると彼女は、様子を察してか状況の説明を始めた。

「快斗さんからお仕事の依頼を受けて、颯人さんの身の回りのお世話をさせていただぐことになりました。四月から毎週土日の二日間だけ、颯人さんの家族としてすぐす契約です」

要約すると、そういうことらしい。

「マジかよ……」

なに考えてんだあのクソ親父は……。

「せつかく来てもらつて悪いけど契約はなしだ。身の回りの世話といつても特に困つてていることはない。自分のことは自分でできるし、不自由はしてないからな」

こう見えて料理は好きだし、掃除や洗濯は定期的にしている。

なぜなら、一人暮らしは墮落しようと思えばいくらでもできてしまうからだ。

墮落はやがてメンタルを崩壊させる。一人で生きていく孤独に耐える強靭なメンタルを維持するためには、こうしたセルフマネジメントも欠かすことはできない。

でも、料理後の食器洗い……あれだけは面倒で、ついため込んでしまうんだよな。

だが、そんな俺の事情を知らない彼女は——。

「それはできません」

きつぱりと答えた。

「既に一年分の契約金もいただいています。仕事としてお引き受けした以上、誠心誠意お世話をさせていただきます！」

彼女は決意に満ちた瞳で俺を見つめる。

胸元でガツツポーズをするあたり本気らしい。

「今日はご挨拶だけと思つて、いましたが、せつかくなので掃除とお洗濯くらいはさせていただきますね。あ、これは契約外ですがサービスですので、お気になさらないでください」

一方的に告げると、鼻歌混じりに部屋を片付け始めた。

「いや、本当に待つてくれ！」

「年齢制限付きの雑誌を隠されるまで待つた方がよろしいでしようか？」

「そういう意味で待つてくれって言つてるんじゃねえよ！」

待つてくれなくてもちろん見つからない場所にしまつてある。あまりにも見つかりにくいくことに隠しきれて自分でもわからなくなり、一年後とかに出てくるんだよな。

まるで成人雑誌のタイムカプセル。思春期男子なら誰もが経験あるだろ？

まあ、一人暮らしだから隠す必要なんてないんだけどな。

「わかつた。とりあえず親父に連絡して確認するから、マジで待つてくれ」スマホを手に取り、彼女に背を向けて親父の番号を表示する。

だが一年ぶりの連絡——発信ボタンを押すのが戸惑われた。

親父に最後に会ったのは忘れもない、中学の卒業式だった。

あの時の衝撃は今でも覚えている——中学の卒業式を終えた帰り道、親父から会社を辞めたこと、そしてこれからは好きに生きていくと告白された。

驚きに言葉を無くしていると、スマホとかなりの金額が入った通帳を渡され『これでおまえも好きに生きていくといいさ』と、親父が借りたこのアパートの前で車から降ろされた。

半ば放心状態で部屋に入ると、なにもない部屋にケージに入った源さんがいたわけだ。以来、一度も会っていないし連絡も取っていない。

「すっげえ気が重いが……そもそも言つてられないか」

腹を括つて電話を掛ける。

だが電波が圈外らしく、すぐに携帯会社の音声ガイダンスが流れた。

「悪い。親父と連絡が取れないんだ。とりあえず今日のところは——？」
口にしながら振り返ると、彼女の姿が見当たらない。

「あれ？」

僅かな時間に忽然と姿を消した彼女。

すると、洗面所の辺りで物音が聞こえた。

洗面所の掃除か？ 近づいて覗きこむと同時に、思考がとまつた。

「はあああああ……」

「……」

目の錯覚だろうか？ いや、どうか錯覚であつてくれ。

どうしてか彼女は、俺のボクサー・パンツを顔に当てて恍惚^{こうごく}の表情を浮かべていた。理解し難い状況に驚きを抑えつつ考える。

彼女には、なにかそうしなければいけない事情があるんだろうか？ 俺のパンツを愛おしそうに握り締め、顔に当てながら悩ましい声^かを上げる可能性——。皆無だつた……やはり彼女がパンツを嗅いでいるようにしか見えない。

「ふひひつ……」

その美貌^{びやう}からは想像もつかない笑い声が聞こえた気がした。

「えつと……なにしてんのかな？」

恐る恐る聞いてみる。

彼女は一瞬だけ真顔になつてフリーズしたが、次の瞬間。

「お洗濯をさせていただこうと思つて、タグについている品質表示を確認していたんです」

彼女はそう答え、やましさなんて微塵^{みじん}も感じ取れない満面の笑みを浮かべた。

なるほど。品質表示の確認だったのか。それなら考えられなくもない。

あぶないあぶない。危うく初対面の女の子に変態疑惑をかけてしまったところだつた——でも男物のパンツを洗うのに、品質表示なんて確認する必要あるか？

「快斗さん、ご連絡つきましたか？」

「え？ あ、いや……それがさ、電波が繋がらなくて」

「そうでしょうね。あんな山奥では滅多めったに連絡なんてつかないと想いますよ」

彼女は洗剤と柔軟剤を洗濯機に入れながら、まるで知っているかのように口にする。

「……あんな山奥？ 月夜野さん、居場所を知つてるのか？」

「はい。この仕事をお受けするために一度会いに行きました」

彼女は洗濯機の蓋ふたを閉めると、不意に俺の手を取つた。

「なつ——!..」

「ちょっとこちらへ来てください」

余りに突然のことで、さすがにドキッとしてしまつた。

彼女にとつては大したことではないのかもしれないが、女の子に手を握られるなんて何年ぶりだらうか？ ここ数年、源さんの手しか握つた記憶がない。

たぶん女の子の手を握つたのは、小学校六年生の時のフォークダンスの練習が最後。めちゃくちゃ嫌そうな顔をするクラスの女子に『さきつちよだけ！ さきつちよだけだか

ら!』と懇願し、しぶしぶ指先だけ繋いでもらつた記憶が甦る。

おかげでしばらく友達から『ミスターさきつちょ』って呼ばれたんだぞクソが。

彼女の手は温かく柔らかで、源さんのプニプニした手とは違つた気持ち良さがあつた。

「これを見てください」

部屋に戻りソファーに座ると、彼女はスマホを差し出してきた。

スマホを受け取り覗きこむと、画面には某動画サイトが表示されている。

再生されているのは、上半身裸の中年男性が山奥で自給自足生活を送つてている様子を動画にしたものらしい。

自分で作つたと思われる小屋を背に、焚火^{たきび}の前で肉にかじりつく姿。

関連動画を見てみると、他にも自作の風呂^{ふろ}や畑、食器などを作る動画もある。

チャンネル名は『四十歳で会社を退職したブッシュクラフト親父の日常。』

チャンネル開設は一年ほど前で、登録者数は三十万ちょっと。一年間で三十万ならそれなりの人気チャンネルだろう。よくわからんが。

だが四十歳で社会からドロップアウトとか、将来設計もくそもあつたもんじやない。人生を舐なめているようなタイトルが本人の無計画な人間性を物語つていて。

本当は会社をリストラされて金がないから山籠^こもりしてるんじやないか?

少なくとも俺はこうはならないと思いながら見ていると、動画の最後に配信者が映る。

画面アップで笑顔を浮かべながら横ピースする姿を見た瞬間、叫んでしまった。

「お、親父——!?」

舐めたタイトルの人気チャンネルの配信者は、俺の親父だつた。

「一年間も音信不通でなにやつてんだこいつは！」

思わずスマホを投げ捨てそうになつた。

「群馬県と新潟県の県境にある山奥で暮らしているんです。週に一度、動画のアップのために下山するそうなのですが、連絡がつくのはその時くらいでしようね」

「月夜野さん……まさかここまで行つたの？」

「はい。装備を整えて行きましたが、三日ほどかかりました」

笑顔でとんでもないことを言つたぞ。

親父も大概だが、そんな親父に会いに行く彼女も大概だろ。

会いに行こうとするバイタリティが恐ろしい。

「そんなわけですから、改めてレンタル家族として、よろしくお願ひしますね」

「いや、状況はわかつたけど、だからと言つて——」

俺の返事も聞かず、彼女はさつと立ち上がり。

「とりあえず、お洗濯とお掃除の続きをやつてしましますね」

制止も聞かず、モリモリと作業を始めた。

そんな姿を横目に、俺は頭と源さんを抱えるしかなかつた。

しばらくして、洗濯と掃除を終えた彼女が戻ってきた。

「今日は初日ですので、これで失礼しますね」

「あ、ああ……」

その間、どうしたものかと悩んでいたが答えは出ない。

「次にくるのは来週の週末です。といいますか、これから毎週土日はお世話になります。レンタルとはいえ家族ですから、なにかあれば遠慮なく言ってくださいね」

「とりあえず、それまでに親父に連絡がつくよう努力をしてみるよ……」

彼女は『頑張つてくださいね』と労いの言葉を口にした。

頑張つたらレンタル家族契約はなしになるんだが、わかっているんだろうか？

「今後は土曜の夜にお泊まりさせていただくことになりますので、色々と必要なものを揃えないといけないですね。私のパジャマとかタオルとか、お風呂用品とかも——」

「待て待て待て！　え!?　泊まり!?」

「家族ですから、当然ですよね」

「いやいやいや！　それはさすがにダメだろ！」

そろ
そろそろ

「颯人さん、家族というのは一つ屋根の下で寝食を共にするものですよ」

彼女は至つて真顔で『なにか問題でも?』と言わんばかりに答える。
いやいやいや、問題しかないだろ。主に俺の下半身的に。

「家族がどうとか知らないけどさ、赤の他人の若い男女が泊まりとかまずいだろ
「あら、颯人さんはまずくなるようなことを私にするつもりなのですか?」

「いや、そういうわけじゃないでだな……世間的にもさ」

「大丈夫です。私、全然そういうの気にしませんから」

彼女のいう気にしないとは、いつたいどちらの意味だろうか?
まずいことをされても気にしないのか、世間体を気にしないのか。
前者だつたらどうしよう。その気はなくともちよつとトキメク。

「ではまた来週、よろしくお願ひします」

そう口にすると、彼女は源さんの前にしゃがみ込む。

警戒されているのもお構いなしに、そつと優しく両手で抱きあげた。

「源さんも、これからよろしくね」

そう声を掛けると、もぞもぞと動いて顔を出す源さん。

「あ、そうだ!」

彼女はなにやら思い出したかのように声を上げ、鞄かばんから封筒を取り出した。

「これ、快斗さんから預かったものです。一人の時に開けるようにと仰っていました」

「俺に？　あ、ありがとう」

お札を口にすると、彼女はやたら上機嫌で帰ったのだった。

「彼女を見送った後、一気に疲れが押し寄せて源さんを抱きしめながらソファーに沈む。
「マジかよ……なんだよレンタル家族つて……どうする源さん？」

源さんは俺のお腹なかの上であおむけになりながら、我関せずと言わんばかりに寝始めた。
マイペースな源さんが愛いとおしい。生まれ変わつたらはりねずみに生まれたい。
そんな現実逃避げんじつひようをしながら、受け取った封筒を開ける。

『誕生日プレゼント、可愛いだろ？　感謝しろよ（笑）父より』

「あの野郎……」

事情を察し、怒りのあまり手が震える。

「あれか!?　彼女が誕生日プレゼントってことか！　ふざけんなクソ親父！」
手紙をビリビリに破いて投げ捨てる。

「マジでどうすんだよこれ……ん？」

溜め息を吐きながら窓の外を眺めると、違和感に気付いた。

ベランダには彼女が干してくれた洗濯物があるんだが、おかしい……昨日穿いていたはずの
お気に入りのボクサー・パンツが見当たらない。
まあいい……今はそれどころじゃない。その辺にあるだろ。

前途多難すぎる新学期の幕開けに、頭を抱えるしかなかつた。

*

四月に入り、学校が始まつた。

今日から高校二年生として新しい生活が始まる。

教室では既にクラスメイトが新しい人間関係を構築しようと盛り上がつていた。

俺の通う望都今泉高校には多くの学科がある。

普通科の他にも流通経済科、情報技術課、農業科、服飾デザイン科の計五つ。

そのため各学科の特別教室も多数あり、校舎は五つと他の高校に比べて多い。

教員室や生徒会室がある管理特別棟、服飾デザイン科の実習室がある南棟、一般教室と情報

技術科の研究室がある大きめの中央棟、そして流通経済科と農業科関連の教室のある北棟。

最後に少し離れた場所にある進路・教育に関するキャリアガイダンス棟。

そんな多くの学科のうち、俺が所属するのは情報技術科。

クラスも学科ごとに別れ、情報技術科は二クラス。

つまり、クラス分けをしても半分は一年の頃と同じ奴らということになる。

新しいクラスでは面識のある者同士が集まり、お互いに友達を紹介し合う。そうやつて新しい人間関係を作り、クラスでの立ち位置の確立やグループ作りに精を出すんだろう。

ご苦労なこつた——それらの行為が、将来的にクソの役にも立たないとも知らずに。

当然俺は、そんなクラスメイトを気にもせず一人窓側の席でうな垂れる。

別にクラスに馴染むつもりは全くもつてない。

というか、馴染むつもりは全くもつてない。

自称プロのぼっちはしての生活は二年になつても変わらない。

俺の掲げるお一人様理論——。

その① 人に期待せず、人に期待されず。

その② 周りに対しても常にニュートラルに。

その③ 必要最低限のコミュニケーションでやりすごす。

絶対の捷ともいえるこの理論の下、煩わしい人間関係を回避してお一人様生活を謳歌する。

その中で、一人で生きて行く強さを身につけるべく孤独耐性を極める日々。

それが俺の青春であり、将来、独身公務員としての人生を全うする足掛けとなる。
じやあなぜ、うな垂れているかつて？

理由は一つ、先日やつてきた月夜野朱莉の件——。

どれだけ考えても対応策は思いつかなかつた。

その気になれば家に上げないという選択肢もあるが、そのせいで部屋の周りをうろつかれても困る。

また彼女のタイプからして、おそらく拒否をしても無駄だろう。

最低限、相手を納得させない限り平穏なお一人様生活は取り戻せない。

とりあえず親父にはメールをしておいた。

かなり長文で送りつけてしまつたが、要約すると『レンタル家族とかふざけんなクソ親父。

山籠もりなんとしてないで早く契約解除しやがれ。動画は面白かった』というもの。

その後、親父がなにをしているのか気になり動画を全部見てしまつた。

なにも持たずに山に籠もり、ゼロから必要なものを作つていく生活。

家作りや畑作り、風呂や陶器まで作る徹底ぶり。罠を設置して鳥やイノシシなんかを捕まえて捌いてみたり、ぶつちやけ下手なドキュメンタリー番組より面白い。

俺の目指す方向とは違うものの、ある意味これも一人で生きていく強さの体現だらう。近々シーズン2が始まるとらしい。今から楽しみで仕方がない。

「おつはよーう♪」

そんなことを考えていると、元気で可愛らしい声が教室に響いた。

視線を向けると、そこには一人の女子生徒と彼女を取り巻く男子生徒たちの姿。

彼女の名前は戸祭羽凧とまつりはな——同じ情報技術科に通う女子生徒。

肩にかかるナチュラルに明るい髪と瞳の色が目を引く美少女で、身長は百五十センチそこそ
こで小柄。美人というよりも可愛らしいタイプで、その辺の芸能人よりよっぽど可愛い。

性格は一言でいうなら天真爛漫てんしんらんまんでぶりっこ。

愛嬌あいきょうの塊のような奴で男女問わずモテまくり、スクールカーストのトップに君臨していく
彼女を知らない奴はない。人を区別せず、誰とでも仲良くできるのも人気の理由だろう。

「みんな送迎ありがとね。また放課後♪」

戸祭が笑顔で手を振ると、男子生徒たちは感極かんきわまつたのか涙を流しながら最敬礼をして去つ
て行く。彼らはペットと呼ばれる戸祭の取り巻きたちで、本人曰く『オトモダチ』らしい。

何号までいるかは知らないが、おまえらそれでいいのか？

なんでも、彼女自身が特定の彼氏は作らない主義と公言しているらしく、日々押し寄せると
んでもない数の告白を片つ端から笑顔で断り続けたらしい。その数三桁けた。

結果、連中はその気持ちを汲んで皆で愛でようと、涙を呑んで紳士協定を結んだらしい。

ぶつちやけ、ただの負け惜しみにしか聞こえない。

くだらない青春すぎる。他にもやることあるだろおまえら。

ちなみにこれ、全部クラスメイトが話しているのを盗み聞きした情報だ。

当然だろ、そんな恋バナみたいな話をする相手なんかいない。プロのぼっちにとつて、情報収集は寝たふりか本を読むふりをしながらクラスメイトの会話の盗み聞きがデフォルトだ。

そうして得た情報は、お一人様生活を支える礎いしづえとなる。

「なんだか騒がしくなりそうだな……」

クラスの中心人物のキャラクター次第でクラスの色は決まる。

それがあの戸祭羽凪だとしたら、おそらくこのクラスは学年で最も騒々しいクラスとなるだろう。それくらい戸祭のパーソナリティは人を引き付けるものを持っている。

下手に巻き込まれないよう、しつかりと対処する必要がありそうだ。

我関せず、窓の外を眺めながら考へていてる時だった——。

「ぐはっ！」

「おつはよーう泉ヶ丘君♪」

油断しているところを、戸祭に全力で背中をぶつ叩たたかれた。

「お、おう。おはよう」

痛む背中を押さえながら挨拶を返す。

そう。こいつはこういう奴なんだよ。

他のクラスメイトが誰一人として俺に挨拶をしてこない中、こいつだけは挨拶をしてくる。

一年の時から一緒のクラスなんだが、どうしてか定期的に絡んでくるんだ。



だから俺にとつて、戸祭は唯一の天敵とも言える存在だった。

「今年も同じクラスだね。よろしく♪」

戸祭はそれだけ言うと、他のクラスメイトの下へと去つて行つた。
無邪気に声を掛けできやがつて……おかげで孤独耐性が下がつただろうが。
心の中で戸祭に文句を言つた時だつた。

「三年になつてもあの子は変わんないね」

隣の席から、そんな声が聞こえた。

視線を向けると、そこには席に座つてこちらに視線を向ける女子生徒の姿。
明らかに染めている髪色に崩した制服。しつかりと濃い目の化粧をしているあたり、不良
とまでは言わないにしろ明らかに軽い感じのする女子だつた。

「……」

どうしてか、しばらく無言で見つめ合つ俺たち。

今のはもしかして、俺に話しかけたんだろうか？

俺は過去、クラスメイトから声を掛けられたと思つて返事をしたら、声を掛けられたのは後
ろの席の奴だつたという事件があつて以来、すぐに返事を返さないように徹底している。

あの時の『え？ なんでおまえ？』感はプロのぼつちといえどさすがに気まずい。
念のため辺りの席を見渡してみるが近くに他の生徒はいない。

マジか。また孤独耐性が下がつたんだけど。

「そうだな。少しは大人しくしてくれるのを願うよ」

初めて見る女子生徒だが、だからだろう、俺に話しかけてくれるのは。

俺のことを知らない奴が、たまにこうして話しかけてくることがある。

座席表で確認すると、築瀬やなせみゆきと書いてあつた。

「隣の席同士、よろしくね」

「ああ。ほどほどによろしく頼む」

早速だが、「お一人様理論その③ 必要最低限のコミュニケーションでやりすぐす」

雑な対応はせず、かといって会話を膨らませもしない。一言二言で終わらせることで距離を必要以上に詰めないように無難に返す。

特に女子は、変な噂うわさを流されると爆発的に広まってしまう危険性が高い。そのネットワークは繋がりの先が見えない厄介なもので、一度のミスが命取りになりかねないからだ。

「新学期からやかましいぞ。さつさと席に着けガキども」

すると、担任の女性教師が教室にやってきた。

パンツスタイルのスース姿で長い髪をかき上げながら、気だるそうに着席を促す。

この教師の名前は駒生こまにゅうゆかり。独身のアラサー女子で担当は現代文。

三十路前に危機感を覚え、去年から本格的に婚活を始めているそしだが状況は芳しくないら

しい。自身で婚活アプリを七個同時にやつていると公言している。

全くもつていらない情報だが、駒生先生は嫌なことがあると授業をやらずに自分の不満を語り続ける癖があり、婚活で出会った男の愚痴で何度も授業を潰したことがある。

本人曰く『結婚できないんじゃない。しなかつただけ』負け惜しみにしか聞こえない。

誰が見ても満場一致で不良教師なんだが、どうしてか、PTAや校長からは高い評価を得ているから謎だ。一部ではPTA会長や校長の愛人説も挙がっている。

見た目が綺麗なだけに、問題は容姿ではなくて性格だともっぱらの噂。

「戸祭、取り巻きの男どもを教室まで連れてくるな。私への当てつけか?」

「違いますよ。先生の魅力に比べたら、わたしみたいな子供なんて相手になりません」

「次から気を付けろ。若い男をはべらせまくるとか、嫉妬で頭がおかしくなりそうだ」

「はあーい。気を付けまーす♪」

とても教師と生徒の会話とは思えない。

「さて、おまえたち——」

教壇に立つた駒生先生は口にする。

「私が担任になつたのが運の尽きだ。最初に言つておくが、私にはおまえたちの面倒を見てい
る暇なんてない。自分たちの好きなようにしろ。知つてのとおり、私は婚活で忙しい」
クラスメイトたちが絶句する。

すがすが

教師とは思えない発言も、ここまでくるといつそ清々しい。

「言葉のとおり、本当に好きにすればいい。口うるさい教師どもよりよっぽどマシだろ？」本
来生徒の自主性なんてもんは、ある程度の自由の中でしか活かせない。私はおまえたちの面倒
を見ない代わりに縛りもしない。この一年間を生かすも殺すも自分次第。ただし、その代わり
自分たちの問題は自分たちで解決しろ。ケツの拭き方くらい学生のうちに憶えておけ」

中には面食らう生徒もいるだろう。

ただ、俺にとつては納得できる部分もあつた。

自立とは、最低限自分のことは自分でできることを意味する。

学生のため金錢的なものは親を頼らざるを得ない。だがそれ以外において、なにをするにも
自己責任という駒生先生の言葉は、俺の掲げるお一人様理論に通じるものがある。

噂では酷い不良教師と聞いていたが、案外どうだろ？

少なくとも俺にとつて、そう悪くないのかもしれない。

「そんなわけで一年間、このメンバーでやつていくわけだが、最初に一人紹介しておく。転校
生の紹介だ。男子ども泣いて喜べ。美少女だ——十年前の私そつくりのな」

一瞬歓喜に沸いた男子生徒たちが、次の瞬間トーンダウンする。

十年前の先生にそつくりとかリアクションに困るだろ。

「入つていいぞ」

駒生先生が入口に向かつて声を掛ける。

すると戸が開き、一人の女子生徒が入ってきたんだが——。
「は……？」

信じがたい光景に、思わず思考がとまつた。

女子生徒は満面の笑みで教壇に立ち、一度小さくお辞儀をする。

「はじめて。月夜野朱莉です」

目にしている状況を、頭が理解してくれない。

「どうか、よろしくお願ひします」

目の前に現れたのは、先日レンタル家族としてやつてきた少女——。

再び歓喜に沸く男子どもの声が、どこか遠く聞こえる。

頭の中で警鐘が鳴り響く——なんで悪い予感てのは当たるんだろうか。

この時の俺は、自分のお一人様生活が脅かされるんじやないか？

そう直感的に感じていた。



2 始まる同居生活と、家族ルール

そんなこんなで新学期が始まつて数日。

つまり、月夜野朱莉が転校してきてから数日後のこと。

俺は、多大なる戸惑いを感じていた。

月夜野朱莉が同じ高校に転校生としてやつってきたこともそうだが、まさか同じ学科で同じクラスとは。それ以上に、彼女が俺に一言も話しかけてこなかつたことについて。

お一人様生活を望む俺としては、それはそれで助かるんだが……。

当の本人は、早くもクラスに馴染んできているようだつた。

こうして昼休み、一人で読書をしているふりをしながら彼女の様子を窺つっているんだが、

仲良くなつたクラスメイトと楽しそうに歓談をしている。

転校生ともなれば、よっぽどのコミュ障じやない限り注目を浴びる。

彼女も例外なく注目を集め、クラスの女子たちと仲良くなつた。

転校してきた時期が一学期で、面倒な人間関係が出来上がる前だつたというのも良かったんだろう。既に完成されたコミュニティの中に加わるのはさすがに難しい。

ie ni kaeru to
kanojyo ga kanarazu
nanika shiteimasu



そうやつて彼女を観察していく、いくつか気付いたことがある。

まず、性格は真面目まじめであり、それでいて社交的であり、どこか育ちの良さを窺わせる。

歩き方や身のこなし^{とまづり}が上品で、さらに美少女とくれば男たちが放つておくはずがない。戸祭ほどではないにしろ話題となり、よそのクラスから男たちが見にくるほどだ。

二つ目に、とても頭が良いということ。

どうやら前の学校は進学校だつたらしく、俺たちが二年になつて学ぶことを前の学校では一年の時に学んでいたらしい。授業態度も良く、典型的な優等生といえる。

三つ目、運動はあまり得意ではないらしい。

体育の授業は男女別のため見たわけではないが、少しどんくさいところがあると女子にいじられていた。大きな胸がじゃまなだけじゃない?ともからかわれていた。

確かに胸は大きい……推定Dカップ。男子の卑猥ひわいな視線を集めているだけはある。

兎にも角にも、早くもクラスで存在感を大きくしていた。

「いついたなにを考えてんだ……」

話は戻り、どうして俺に声を掛けてこないんだろうか?

すでに俺が孤立していると知っている他の奴やつらならまだしも、彼女は知らない。

もちろん、だからといって必要以上にグイグイ来られても困るが、お互い面識がある上に同じクラスだったことについて、向こうも驚いたことだろう。

であれば、なにかアプローチがあつてもいいはずだ。

悩んだ末、俺はこちらから彼女に声を掛けることにした。

自分から声を掛けるなんて孤独耐性を下げる最も愚かな行為だが仕方ない。

少なくとも、レンタル家族の件だけは早急に口止めをしておかなければならぬ。

自分から誰かに声を掛けるなんていつ以来だろうか？

あれは確か中学三年生の終わり。

お一人様生活を始めて間もない頃、学校でクラスメイトの女子の財布を拾つたから届けてやつたのに舌打ちで返されたのが最後だ。

それ以来、俺は落とし物を見かけたら見ぬふりをするよう徹底している。

また舌打ちされた時のことを考えながら、彼女が一人になるタイミングを窺い始めた。

なかなかどうして、彼女に声を掛けられるタイミングがやつてこない。

勘違いされないように最初に言つておくが、あまりにも自分から話しかけなくなつたせいで

声の掛け方を忘れたとか、緊張しそぎて手汗がびっしょりだからではない。

転校生補正だろう。クラスメイトが過剰にコミュニケーションを取つてゐることもあり、常に誰かしらと一緒に。自分だつたらいい加減ほつとけとキレてしまいそうだ。

だが、チャンスはお昼休みにやつてきた。

彼女は一人で教室を後にし、俺も意を決して後を追う。

しばらく一人で歩いていたが、不意に彼女が廊下を曲がった。

見失わないように急いで追いかけ、廊下を曲がった直後だつた――。

「私になにか用かな?」

泉ヶ丘君

どうやら後をつけられていることに気付いていたらしい。

待ち構えていた彼女が、笑顔でそう口にした。

だが、その表情や聲音に違和感を覚える。

「あ、ああ……ちょっと話がしたくてな」

「なに? お話だつたら教室でもいいんじゃない?」

やつぱり違う。

俺の部屋で話していた時は敬語だつたのに、今は普通にため口だ。

いや、同じ学年のクラスメイトなんだから当たり前か。

「ちょっと人前では話しくいことなんだ」

言いかけて、不意に両手で口を押さえられた。

彼女は周りを確認するようなしぐさを見せると俺の手を取り。

「こっちに来て――」

逃げるようすに小走りで俺を連れて行く。

やつてきたのは、人気のない階段の裏だった。

「ここなら大丈夫ですね」

彼女の声音が変わるのがわかつた。

敬語——初めて話をした時と同じ。

「驚いたよ。まさか同じ学校で、同じクラスになるなんてな」

「私は快斗さんから同じ学校だと聞いていましたから。でも、同じクラスになれるとは思つてなかつたので嬉しいです。もうこれは運命といつても過言ではありませんね！」

いや、過言だろ。過言すぎるだろ。

そんな目を輝かせて言われても困る。

「それで、お話というのはなんでしょう？」

「あ、ああ……その、この前の件についてなんだが」

すると彼女は、口の前で人差し指を立て。

「その話は、学校ではやめましょう」

少し真面目な口調で言つた。

「私たちの関係は秘密にしておくべきだと思います。少なくとも、一人きりの時とは違う接し方をした方がいいのではと。クラスのみなさんに理解していただけるとは思えません」

その言葉に、俺は胸を撫で下ろす。

「わかつてゐるなら助かる。思春期真っ盛りの高校生なんて、どいつもこいつも恋愛脳ばかりで誰と誰が怪しいとか噂うわさするのが大好きだからな。自分がそのターゲットになるのは勘弁だ」それだけはなんとしても避けたい。

「わかりました。学校内では普通のクラスメイトとして接します」

「そうしてくれ。俺もそうする」

「他人行儀に感じることもあるかもしませんが、許してください」

「気にしなくていいさ。無視してくれるくらいが丁度いい」

「なるほど。学校では放置プレイをご希望ということですね！」

勘違いも甚だしい。まるで俺がそう望んでいるみたいじゃないか。そりやクラスでソロ活動していたらある意味放置プレイみたいなもんだが、俺じやなかつたら泣いてるぞ。突つ込むのも面倒だからそれでいいや。

それに、彼女はまだ知らないのだから仕方がない。

俺がこの一年間、どういう立ち回りをしてきて今に至るかを。

「週末、楽しみですね」

「その件についてはまだ受け入れてないぞ」

そう口にすると、今度は小さく笑つた。

「受け入れてもらえるように頑張りますね」

「いや、努力でどうこうつて話じゃなくてな……」

「先に戻ります。午後のホームルームの前にお手洗いに行きたくて教室を出たので」

「そいつは悪かつたな……」

小走りで去っていく彼女を見送りながら、溜め息が漏れてしまう。
やつぱり彼女の内で、レンタル家族契約は確定事項らしい。

どうしたものか……新学期早々、溜め息を吐いてばかりだ。

教室に戻ったのは、始業のベルが鳴ると同時だった。

すぐに駒生先生がやつて来て、教室に入つてくるなり口にする。

「クラス委員長を決めろ。方法はおまえたちに任せる。私は婚活アプリで男探しをしているから決まつたら声を掛ける。仕切りはそうだな……戸祭。おまえがやれ」

「えー！ わたしそういうの苦手なんですけどー」

「学校一の知名度を誇る奴がなにを言つているこのぶりっこが。いいからやれ
「はあーい」

戸祭は嫌そうに声をあげながら、それでも席を立つて教壇に向かう。

嫌と言ひながら、それでも従うあたり根は素直なんだか目立ちたがりなんだかわからん。

「駒生先生、ちなみに決まつた後つてどうするんですか？」

「どうもしない。私の邪魔をしなければ授業が終わるまで好きにしてろ」

さすがにフリーダムすぎるだろ駒生先生。

「やつた！ それじゃちやちやつと決めて遊ぼう！」

戸祭の言葉に、クラスメイトが歓喜の声を上げた。

「たぶんいないと思うけど、一応聞いておこつかな。やりたい人がいたら手をあげてー」

静まり返るクラスメイト一同。

そりやそうだ。クラス委員長なんて雑務、好んでやりたがる奴なんていないだろ。

「だよねえ。じゃあ推薦で！ さつそくだけわたしから推薦しまーす」

そう言いながら戸祭は一人の女子生徒を指差す。

「月夜野さん、どう？」

まさかの指名だった。

指名された彼女は、戸惑いのあまり辺りを見回す。

いやいや、他に月夜野さんはいないだろ。

「私……？」

「そう！」 ほら、転校してきたばかりで学校のこともまだ詳しくないとと思うし、クラス委員長

をやることで学校を知るきっかけになると思うの♪ それにさ、このクラスだけじゃなくて他のクラス委員長との付き合いもあるし、友達関係も広がると思うんだよね！」

そんな戸祭の猛プッシュを聞きながら確信する。

戸祭は自分がクラス委員長をやらされないために、彼女を推薦したんだろう。

戸祭はどう見てもこのクラスの中心人物だ。推薦となれば必ず名前が挙がるだろうし、そして挙がった以上、戸祭の人気を考えれば圧倒的多数で支持されるはずだ。
目立ちたがりのくせに面倒事は嫌い——そんな性格が見て取れる。

本当、その辺の立ち回りも抜かりがない奴だ。

「そうね。みんなが私でいいって言つてくれるなら、やつてみようかな」

「決まりだね！」

その瞬間、教室が拍手に包まれた。

「先生、クラス委員長が決まりましたー！」

「ああ、早かつたな。私はちょうどイケメンとマッチングしたところだ。ここからが勝負

——早急に食事の約束を取り付けたい。好きにしていいから邪魔だけはしてくれるなよ」

「はあーい♪」

こうして、我がクラスの委員長が三分で決定したのだった。

*

そんなこんなで、新学期の初期イベントを一通り終えた週末。

とうとう土曜日の朝が来てしまった……。

気が重すぎる。気が重すぎて朝から胃が痛い。

残念ながら、契約の件について進展はなかつた。

相変わらず親父から返信はないんだが、動画サイトに最新動画が上がっているのはどういうことだ？ 絶対メールは受信してるだろ！ 読んでないのか無視してんのか！？

ちなみに親父のチャンネルの最新動画の内容は、これまで暮らしていたホームキャンプを変更し、別の場所で一から生活基盤を作り直すというものだった。

『ブツシユクラフト 親父の日常。シーズン2——第一話 家造り』

まずは木を切り倒すための石斧の作成から。

ちようどいいサイズの石を見つけると、粗い石で砥いで形を整え、次に細かな石で刃を鋭利に仕上げる。用意した六十センチほどの木の棒に穴を空け、石をはめ込んで完成。

石斧で切り倒した木を柱として据え、植物のツルを使って細かな骨子を組み上げる。

その上に大きな植物の葉を何層にも重ねて屋根を作つた。

次に、粘土質の土と水を混ぜて作った泥を重ねて壁を塗つていく。

その工程で部屋の一画に暖炉を作り、排煙用の煙突も合わせて作成。最後に木で作ったドアと窓を付けると、人一人が住むには充分すぎる家ができるがつた。

中でも驚いたのは、床を掘って石で蓋ふたをしてから隙間すきまを泥で埋め、床下に通気口を作ったこと。通気口の入口で薪を燃やすと熱気が床下を循環して中を温ぬくめる仕様らしい。

言うならばアナログの床暖房。なんとも素晴らしい生活の知恵である。

少しづつ完成に近づいて行くその工程が、見ていてめちゃくちやワクワクする。動画の最後はお決まりの笑顔で横ビース。

うむ。次の更新が楽しみでしかたない。

……そうじやねえだろ！ なにしてんだよ俺は！

これから朱莉がやってくるのに親父の動画を楽しんでる場合じやねえだろ。

「あーもう！ 結局なんの解決もしてねえ！」

隣で丸まっていた源さんが俺の叫び声に驚いてビクッと身を震わせる。

「ああ……ごめんな源さん」

ソファーの上で右往左往する源さんを抱き上げて顔の前に持つてくる。

「源さん。俺たちの気ままな一人暮らしが終了の危機なんだ。なんかいい方法ない？」

源さんは鼻をヒクヒクさせながら首をかしげる。かわい

そんな姿がとてもなく可愛いんだが、源さん相手に現実逃避しても仕方がない。

「どうしたもんか……」

その時だった——インターほんの音が彼女の到着を告げる。

「ただいま戻りました！」

俺が立ち上がるよりも先に、彼女が玄関を開けた。

言葉のとおり、まるで自分の部屋に帰ってきたかのようなフランクさ。もはや彼女の内で、この部屋は自分の部屋でもあるという認識なんだろう。

立ち上がり、彼女を出迎えるために玄関に向かう。

そこには、とても楽しそうに笑顔を浮かべる彼女の姿があつた。

今日は暖かいからか、薄手の白い花柄のシャツに淡いピンクのフレアスカート。

この前のピンクのワンピースもよく似合っていたが、こういうコーディネートも悪くない。

降ろした髪を少しだけ内側に卷いていて大人っぽく見えた。

「ただいま戻りましたって、どういう意味だ？」

「颯人さん、知らないですか？　帰ってきたらただいまと言るのは当たり前のことですよ？」

今まででは一人暮らしをさせていたので言うこともなかつたと思いますが、これからは颯人さん

も言ってくださいね。ただいまって言える相手がいるって幸せなことです」

「届託のない笑顔で口にするんだが……違う、そうじゃない。鈴木雅之が歌い出すぞ。

いや、ある意味で予想通りすぎる返答に突つ込む気すら起きない。

「まあ、とりあえず座りなよ」

どちらにせよ一度、しっかりと話をする必要がある。

俺はソファーに座り、彼女にも隣に座るよう促した。

「失礼します」

彼女が腰を掛けると、俺はゆっくりと話しかけた。

「改めてレンタル家族契約について話をしたいんだが」

「はい。私も颯人さんにお見せしたいものがあるんです」

「お見せしたいもの?」

彼女は鞄から取り出したA4サイズの紙を差し出す。

受け取つて確認すると、そこには『レンタル家族契約書』と書かれていた。

小難しい言葉で記された文言はともかく、内容を要約すると『高校卒業まで俺の身の回りの世話をするレンタル家族として一緒に過ごすこと』が詳細に記されている。

最後には、親父と彼女のサインと共に印が押されていた。

「冗談じゃないんだな……」

わかつてはいたことだが、思わずぼそりと呟く。

できれば冗談であつて欲しいと思っていただが、こうして形として見せつけられると信じないわけにはいかない。

そして契約書には一つのルールと、いくつかの注意事項が記されていた。

『ルール① 家族が困っている時は、全力で、無償で、無条件で支えること。また、最初にお互い一つずつルールを決め、破った場合はペナルティを科すものとする。ペナルティ・相手のお願いを一つ、なんでも聞くこと。』

追記・契約を反故とした場合、泉ヶ丘颯人の住んでいる部屋を解約することとする』

「ふざけんなクソ親父！」

とつさに契約書を破きそうになつた。

なんだ最後の一文は！

部屋を解約!! ここを出て行けってことか!?

「そんなわけですので颯人さん。改めてお願ひします」

彼女は三つ指をついて深々と頭を下げた。

そんな彼女を見下ろしながら、俺は納得する。

なるほどな……彼女の押しがやたらと強かつたのも、レンタル家族契約を断られるとは微塵も思っていない発言が多かったのも、つまりはこういうことか。

あの親父なら、本当に部屋の解約をしかねない。

そうなつたら、高校生の俺は自分で部屋を契約することができず路頭に迷うことになる。

親父から受け取った纏まつた金は、おそらく俺が大学を出るまで充分な余力があるだろうけど、金があつたところで未成年の俺には新しい部屋を契約することはできない。

瞬時に様々なケースを想定し、結果——受け入れざるを得ないと判断した。

「わかつたよ……」

正直参つた。冗談じやない。

だが、もういつそポジティブに考えるべきだ。

——俺が理想とするお一人様生活を謳歌するための、長い人生のうちのたつた二年。そう考えれば耐えられる。なにもこのふざけた状況が一生続くわけじゃない。

全ては、独身公務員として定年退職を迎えるという夢のために。

「こういうことなら仕方がない」

「ありがとうございます！」

彼女は嬉しそうに胸の前で手を合わせて笑顔を浮かべた。

「じゃあさつそくだけど、決めるべきことを決めてしまおう」

「はい！」

契約書にあつたルールもそつだが、一緒に暮らすとなれば役割分担は必要だろう。

後からあれこれ揉めるのは、正直面倒もというのもある。

「お互いにに一つずつルールを決めるつてやつだけど……月夜野さんはなにかあるか？」

「朱莉と呼んでください」

「え？ それがルール？」

「いえ、ルールとは別です。家族なのに苗字みょうじで呼び合うのは変ですかから」

「そりやそうだけど……」

さすがに女の子を名前で呼ぶのは抵抗がある。

「ちなみに呼び捨てで結構です」

さらにハードルを上げきやがつた！

「じゃ、じゃあ……朱莉は、ルールどうする？」

ダメだダメだダメだ！

むずむずしすぎて耐えられん！

「そうですねえ……」

彼女は名前で呼ばれ満足そうな表情を浮かべると、少し悩んだ素振りそぶを見せる。

「実は二つ候補がありまして、どちらにするか決めかねています」

「三つ？ まあ、とりあえず言つてみれば？」

「一緒に寝るか、一緒にお風呂ふろに入るか——」

「待て待て待て——！」

はい!? なに言っちゃつてんの!? 正氣か!?

いや、待つのは俺だ。

落ち着け。冗談という可能性もある。

真面目な印象とは裏腹に、じつはめちゃくちゃお茶目とか——。

「このお部屋の寝室は一つだけですし、それに本来、家族というのは一緒に寝るものですね。よく親子川の字になつてというじゃないですか。でも、ガス代や水道代を考えれば一緒にお風呂に入る方が節約になりますし、家族のコミュニケーションにもなるかなと……」

……そんな可能性はなかつた。

やはり真面目な印象通り、マジで言つて いるようにしか見えない。

どうなんだろうか？ 俺はまともな家族生活を送つてこなかつたからわからない。

母親は物心がついてすぐに亡くなつたし、父親はいつも仕事で帰りが遅かつた。それは仕方がないことだと思って いるし、別に自分が人より不幸だとは全く思つていな。

むしろ小さな頃から自分で料理や掃除なんかをしていたこともあり、そのおかげで一人暮らしに必要な家事スキルが身についたことについては良かつたとすら思つて いる。

だが、そのせいで朱莉の言う『普通の家族』というものがわからず判断できない。

「どうしましよう？ ベッドは別にして、私がこのソファーで寝かせて いただくという方法も

ありますよね。そう考えますと、やっぱり私のルールは一緒に風呂に入——

「俺のルールは風呂だけは別にするつてことにしてくれ！」

朱莉の言葉を遮^{よさえ}つて、こちらのルールを先に提示した。

「……するい」

膨れつ面でジト目を向けられた。

「いや……仮に朱莉の言うとおり家族は一緒に風呂に入るものだとしても、やっぱいい年の男と女が一緒に風呂入るつてまずいだろ。家族とはいえ契約で、やっぱ他人だしさ」

そう言うと、朱莉は少しだけ残念そうな表情を見せた。

「わかりました。では、私のルールは寝る時は一緒にベッドにします」

先ほどまでの拗ねた感じはどこへやら、機嫌良さそうに口にした。

なんだろうか……なんだかしてやられた気がする。

俺のルールは結局のところ、危機回避で決めさせられたようなもの。朱莉としては希望の一択のうち一つがルールになつたわけで……まさか初めからこうなるように仕向けてた？

朱莉の様子を窺うと、鼻歌混じりに契約書をしまつている。

いや、どちらかといえば策を講じるタイプよりも天然だろ。

考えすぎか……。

「添い寝……ふひひつ」

「え？」

「そんなことを考えていると、朱莉がなにか呟いたような気がした。

「今……なにか言つたか？」

「え？ なにがでしよう？」

朱莉は至つて真顔でそう答える。

空耳か？ なんか凄くゲスい笑いが聞こえた気がしたが……。

「いや。なんでもない……」

やつぱり気のせいらしい。

「初期ルールも三つ決まつたわけだし、後は生活していく中でなにか支障があれば、その都度話し合うってことでいいか？」

「そうですね。そうしましょう」

「それとな、もう一つ話しておきたいことがあるんだが——」

それは、レンタル家族契約を続ける上でとても大切なこと。

「改めてこのことは、学校やクラスメイトには秘密にしてもらいたい

もしバレたら、想像できるあらゆる最悪のことが起こるだろう。

「はい。もちろん私も、他の方にお話しするつもりはありません」

「学校では必要以上の干渉は避けてくれると助かる」

「わかりました。颯さんのご都合の良い形で構いません」

「悪いな。助かるよ」

「後は自分たちがぼろを出さなければ、少なくとも週末以外は今までどおり。常に細心の注意は必要だろうが、最低限のお一人様生活は維持できそうだ。」

「こうして秘密を共有しあうと、家族って感じがしますね！」

朱莉は楽しそうに言うんだが、俺にはそんな余裕はない。

むしろ秘密という名の弱みを握られたようにしか思えない。

「さて、決めることも決めましたし、今からデートをしましよう

「デ、デート!?」

あまりにも突拍子もない提案に思わず声が裏返った。

「はい。必要な物を買い揃えたいですし、この街のことをいろいろ知つておきたいんです」

「ああ、買い物に付き合えってことね。家族として荷物持ちくらいは付き合うさ」

「こんな時ばっかり家族と言うんですね。やつぱりするいです」

「悪いな。一人暮らしが長くなると多少のずるさは必要なのさ」

適当に返すと、朱莉は少し寂しそうな表情を浮かべた。

「ああ、そうか——俺は今、気を遣わせてしまったんだな。」

普通の家庭ですごしてきた奴から見れば、一人で生きてきた奴は可哀想——そういう風に

捉^{とら}えて仕方がない。まだ俺に友達がいた頃、同じようなリアクションをされたこともある。

今後は冗談でもこの手の発言は控えよう。

残念ながら、俺には可愛い女の子を困らせて喜ぶ趣味はない。

「じゃあ今から行くか。源さん、留守番よろしくな」

「源さん、^{あいさつ}行いってきますね」

源さんに挨拶^{あいさつ}をする俺に続いて朱莉は源さんに手を振る。

こうして、レンタル家族初日の買い物へ出発した。

部屋を出た俺たちは、近くのバス停でバスがくるのを待っていた。

土曜日の午前中ということもあり、待っているのは俺たちだけ。

「どこに行くんです?」

「駅の西側にある商店街に行こうと思つてる。^{いなか}田舎^{いなか}の商店街なんてニュースじゃどこもシャツターア街つて言われてるが、この街の商店街は意外と活気があるんだ。個人商店だけじゃなくてチエーン店やドラッグストアなんかを誘致^{유치}することで、寂れないようにしてるらしい」「そうなんですね」

「そう遠くないところにショッピングモールもあるんだが……そこは学生たちがこぞつて集ま

るから、一緒に出掛ける時は避けた方がいいだろ。クラスメイトに会う確率が高すぎる」

「そうですね。今度一人の時に行つてみます」

「ぜひ行つてみるといい。アパレル系のテナントも多いから、なにをするにも困らないぞ」「そんな会話ををしていると、すぐにバスがやつてきた。

朱莉と一緒に乗り込み、揺られること十五分——駅の東口に到着した。

「ここから歩いて十五分でとこかな。少し歩くが大丈夫か?」

「はい。街並みも見たかったので、むしろ嬉しいです」

それからしばらく会話もほどほどに歩き続ける。

朱莉は時折、きょろきょろしながら辺りを見回していた。

新しい環境に対する不安よりも、好奇心が勝つていて。そんな印象を受ける。

知り合つて一週間だが、朱莉は裏表がない女の子なんだろうと思う。初対面の男に対してもグイグイきたり、自分の意見をはつきりと言う時もあれば、気を使える一面も見せる。

他のクラスメイトのような派手さや幼さは感じられず、どこか大人びていた。

先日も感じたことだが、きっと育ちが良いんだろう。

だが、俺が知っているのはそれだけだ。

朱莉が今までどこでどんな生活をしていて、どうして転校してきたのか？ そもそもなぜレンタル家族なんて仕事を受けるに至ったのか？ 知らないことが多すぎる。

せんざく

たやす

でも、それらを詐索^{せんざく}するのはやめよう。
 それらの事情が、おそらく特殊だというのは想像に容易^{たやす}いが、朱莉の問題だ。
 自分から言つてこない限り無暗に聞く必要はない。あくまで契約としての家族関係。知る必要があるとしたら、きっと朱莉から話してくるだろう。

ただ思うのは、正直ほつとしている自分がいる。

レンタル家族の相手が金髪ギャルで『マジ卽!^{じき}』とか言つてたら会話にならない。そんなことを言う奴は十年後に思い出して恥ずかしさのあまり自ら掘つた穴に落ちてしまえ。

「颶人さん！ 川が流れています！」

朱莉は渡つている橋の中央で柵^{さく}に攔^{つか}まりながら下流に目を向ける。

「そんな珍しいものか？」

「私の住んでいた街もたくさん川があつたので、つい嬉しくて」

「この街はそれなりに栄えてるが、少し離れるだけで一気に田舎だからな。川なんていくらでもあるぞ。夏になるとリア充^{じゅう}どもがあちこちの川辺でバーベキューやってるし」

「そうなんですか？ 楽しそうですね！」

「朱莉ならそういう友達もたくさん作れるだろ」

「私はお友達とではなくて、颶人さんと一緒にやれたらと思つたんです」

「なつ……」

「夏になつたらやりましょうね。バーべキュー」

「……考えておくよ」

本当に朱莉はこの手のことをストレートに言つてくるんだが、どこまで本気で言つてているんだ？ 社交辞令か、家族としてか、はたまた……うん。それはないな。

お一人様理論その① 人に期待せず、期待されず。当然勘違いもしない。

俺みたいに孤独を愛する者は普段、屋上なんかの人気のないところで活動するんだが、そうすると色ボケした男女の告白シーンなんかを見たくもないのに目ににしてしまう。

少し仲良くなつて『俺たち両想いじゃね？』なんて勘違いして告白をしたもの『あ……ごめん。そういうつもりじゃなくて……』なんて、お決まりのハートブレイク。

その後、クラスで暴露されて恥ずかしい思いをした先人たちは数知れず。いつの時代も繰り広げられてきた悲しい青春の一ページ。告白なんてするんじやなかつたなあ……。

つまり、朱莉が誘つてくれるるのは家族としてのイベントの一つだからだろう。

焼肉店でもファミレスでも一人の俺が、家族つてだけでこんな美少女と肉が食えるとは。

どうでもいいけど外食するたびに店員に『何名様ですか？』って聞かれるんだが『どう見たつてお一人様だろこのヤロウ！』って思うのはきっと俺だけじゃないはず。

なんてバカなことを考えていると、目的の場所に辿りついた。

「さ、見えてきたぞ」

商店街のアーケードを指差すと、朱莉はぱつと顔をほころばせて俺の手を引く。

「早く行きましょう！」

「ちよつ——」

こうして手を繋ぐのは三度目。

いい加減、心臓に悪いからやめて欲しい。

商店街に着くと、土曜日だけあって多くの人が歩いていた。

この商店街は通称シリウス通りと呼ばれていて、全長は約五百メートルにわたる。

その全てがアーケードに覆われていて、天気を気にせず買い物ができることもあり昔から市内の人気スポットの一つとして認知されている。

その辺の商業施設と比べても引けを取らない店舗数を構え、特に主婦や家族連れに人気がある場所だが、近年は若者を呼び込もうと人気チエーン店などの誘致に力を入れていた。一応念のため、知り合いがいないか辺りを見回した時だった。

「ん——？」

一瞬、少し離れた電柱の辺りに人影が見えたような気がした。
しばらく様子を窺うが、特に変わったところはない。

「気のせいか……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。それで、まずはなにを見たいんだ？」

「お風呂用品とお部屋着が見たいです。後は適当にお店を見て、欲しい物があれば」「わかった。じゃあまずはドラッグストアかな」

商店街にはいくつかのドラッグストアがあるが、一番近い店に足を運ぶ。

朱莉はシャンプーとコンディショナー、ボディソープなど迷わず手に取る。普段から使っているものなんだろう。詰め替え用も合わせて買うあたりしつかりしてゐる。

他にも化粧品コーナーでいくつか物色。

会計を済ませて店を出ると、次に向かったのは某アパレルチェーン店。ローコストとバリエーションに富んだ品揃えで若い世代から支持されている店。男性物よりも女性物を中心に出していることもあり、午前中から多くの女性がいた。

「颯人さんは、女性のお部屋着の好みとかあります?」

「いや……特に」

部屋着の好みってなんだよ。

下着の好みなら大いにありだが、部屋着なんて初めて聞いたぞ。

「では、好きな色は何色ですか?」

「俺の好みに合わせようとしてるなら気にしなくていいぞ」

「気になります。一緒に暮らすのですから、相手に合わせることも大切です」

言っていることはごもつともなんだが、たぶん合わせる努力の方向性が違う。

そういうのはこう、生活スタイルとか食事の好みとかじやないだろうか？

朱莉は俺をじっと見つめながら返事を待つ。

ああ……答えないと選択肢はないんだな。

「そうだなあ……前に着てたピンクのワンピースは似合ってたんじゃないかな」

「え……」

無難に返したつもりが、朱莉は少し驚いた様子で頬ほおを染めた。

「ありがとうございます。今日もあるのワンピースの方が良かつたですか？」

「いや、今日の服も似合ってるから気にするな」

すると一瞬だけ、もの凄く顔がだらしなく崩れた気がした。

衝撃のあまり思わず目をこすって二度見するが、いつもの笑顔だつた。

気のせいか……さつきの人影といい疲れてんのかな……。

「では、部屋着はピンクにしようと思います。いえ、部屋着だけではなく今日買うものは全部

ピンクで統一しようと思います。そうします」

「やめてくれ。俺の部屋が一気にメルヘンっぽくなっちゃうだろ」

「決定事項です。諦めてください」
あきら

すると本当に部屋着だけじゃなくタオルや靴下やスリッパなど、全てピンクで揃え始める。ちなみに本人は隠していたつもりだろうけど、下着もピンクのレースだった。
まあ……下着がピンクのレースは悪くない。

「颯さんはなにか買うものはないのですか？」

「特にないな」

「ではせっかくですから、二人の新しい生活をお祝いしてなにかプレゼントします！」

「いや、悪いからいいよ」

「遠慮なさらないでください。私が差し上げたいんです！」

笑顔を向けて思いつきり詰め寄つてくる。

押しが強すぎる……また答えないダメなパターンだ。

「じゃあ朱莉が選んでくれよ」

「いいのですか？」

「ああ。プレゼントってのは贈る側が選ぶものだろ？」

「わかりました。任せてください！」

朱莉は気合の入った表情を浮かべながら、男性物のコーナーへ向かう。
俺はその後に付いて行きながら考える——。

朱莉がプレゼントをしてくれるなら、俺もなにか返さなくちゃだよな。不本意だとしても一人の生活の記念というのなら、貰いつぱなしというわけにもいかない。

お一人様生活をしていて誰かに物をあげるなんて機会はなかつたから、なにをあげていいのか全くわからん。街行くカッフルどもに心の中で爆弾のプレゼントなら毎日してるが。困つたな……。

「これにします！」

朱莉が声高らかに差し出したものを見て目を疑つた。

「……ボクサー・パンツ？」

「はい！」

これしかないと言わんばかりのドヤ顔だつた。

そんなドヤ顔ですら可愛いが、なぜそれを選んだ……。

「見た瞬間これしかないと思いました！」

自信満々の柄は、なんとピンク地ベースのさくらんぼ柄。さつきの宣言どおり、本当に今日はピンク以外を買わないつもりか？ それとも暗に、俺がチエリーボーイだと言いたいんだろうか？ まあ、そうだけどさ。

「ほ、他に選択肢はないのか？」

「違う柄の方が良かつたでしようか?」

「柄の話じゃない! パンツ以外はないのかって言つてんだよ!」

思わず大声を出してしまい、周りの女性客が一気に視線を向けてくる。

『あらあら、彼女からのプレゼントかしら?』『最近の高校生はカップルで下着を買いにくるの

ね』『今晚はその下着でなにをするつもりかしらウフフ?』『リア充死ね』

一部の嫉妬^{しつと}に満ちたコメントはさておき、お姉様方が微笑ましい視線を向けてくる。

耐えられん! なんだこの羞恥^{じゅうち}プレイは!

「颯人さんがこの下着を穿いている姿を想像するだけで……ぬふふ」

「わかった! もうこれでいいからさつさと会計を済ませて出よう!」

朱莉がちょっと言葉で形容し難い表情をしていたような気がしたが、それどころじゃない。

慌てて朱莉の腕を掴んでレジへ直行する。

まあ、この前パンツが一枚なくなっていたし、ありがたく貰つておこう。

そう無理やりポジティブに考えながら、二軒目での買い物は終わった。

お昼すぎ、腹が空いた俺たちは休憩も兼ねて近くのパスタ屋へ入った。

商店街の一角にあるこの店は古くからあるパスタ屋で、昔から夫婦一人で切り盛りをしてい

る。洋風のレトロな建物で、どことなく雰囲気のある人気店。

夫婦が飼っている老猫がお客様を出迎えてくれるのも人気の一つで、お客様が来ると小さく鳴いて知らせてくれるため、ドアに来客を知らせる鈴を付ける必要がないらしい。

中学までは友達とよく来ていたが、一人で入るにはハードルが高く久しぶりだつた。

「いいお店ですね」

朱莉は気に入つたらしく、店内を興味深そうに見渡している。

すぐにウエイターが注文を取りに来てくれて、俺はベーコンとほうれん草のパスタを、朱莉はカルボナーラと飲み物を頼んだ。

しばらくして注文した品が運ばれてくると、朱莉は目を輝かせながら口に運ぶ。
〔^{おいしい}です！〕

「そいつは良かった」

それから俺たちはゆっくりと昼食を味わつた。

「そう言えば、役割についてなんだが」

食べ終わつた頃、食事のことで思い立ち朱莉に話しかける。

「晩飯の用意はどうする？ どちらかの負担になつても悪いし交互に作るか？」

そう提案すると、朱莉の顔からフッと笑顔が消えた。
あれ？ 俺なんか変なこと言つたか？

「お料理……ですか」

なんだか思い詰めたような声で呟く。

なんだろう。一気に場の空気が重くなつた気がするというか……。

踏んじやいけない地雷を思いつきり踏み抜いたような予感。

「できれば、お料理を作るのは遠慮させていただきたいです……」

「苦手なのか？ それなら俺が作るよ。掃除も洗濯もしてもらつてるしな」とすると朱莉は、少し悩んだような素振りを見せて話し始めた。

「苦手と言いますか、刃物を持つことに少し抵抗がありまして」

「抵抗？ 恐いとか？」

「どちらかと言いますと、怖いのは私ではなく周りの方と言いますか……」

思わず首を傾げてしまつた。

伝わらないのがわかつたのか、朱莉は続ける。

「その……私、刃物を持つてゐる時のことをあまり憶えていないのです」

「とんでもない告白だつた」

「き、記憶がないってことか……？」

「はい。ずっと前に、家族に料理を振る舞おうとしたことがあつたのですが、気が付いた時はベッドで横になつていて……それ以来、刃物を持たせてももらえないのです。大好きだつたお

ばあちゃんの最後の言葉で、朱莉は包丁だけは持っちゃいけないと言われて……」

「そ、そうか。わかつた。まあ外食でもいいしな」

「ありがとうございます」

思いつきりバイオレンスな予感しかしないんだが……。

とりあえず、おばあちゃんの遺言だけは守ろうと誓つた。

その後、俺たちは飲み物を片手に気ままに商店街を見て回る。

朱莉は時折、物珍しそうにお店のウインドウを眺めては楽しそうにしていたが、適当に買い物をしているうちに気が付けば時間は夕方の四時すぎ。

「結構いい時間になつたな」

「そうですね」

「少し早いが、そろそろ帰るか。家のこともやらなくちゃだしな」

「あの——」

俺がそう提案すると、朱莉がなにか言いたそうにしている。

「この辺に、城址公園(じょうしょくこう)がありませんでしたか?」

「城址公園? ああ……あるけど、知つてるのか?」

「実は昔……小さな頃なのですが、何度かこの街に来たことがあるんです。その時に桜を見にきた記憶があつて、確かこの辺りだったと思うのです」

朱莉は懐かしそうに口にする。

その姿は、どこか憂いさえ帯びていた。

「……少し歩くけど行つてみるか？ 桜もちょうど見頃みごろだと思つぞ」

「いいのですか？」

「ああ。俺も久しぶりに行つてみたい」

「ありがとうございます」

笑顔を浮かべる朱莉を連れて、城址公園へと向かう。

それから十五分ほど歩くと、視界には城址公園のシンボルである城と桜が見え始めた。

周りはお堀に囲まれていて、正面の橋を渡つて中に入る。中には整備がされた敷地が広がつていて、中央の広場をぐるりと囲むように無数の桜の木が立ち並んでいた。

「わあ……」

朱莉は桜を眺めながら、感嘆の声を上げた。

「ここで合つてたか？」

「はい……ここです」

朱莉は小走りで広場の中央へと向かい、辺りをぐるりと見渡す。

俺も少し遅れて朱莉に歩み寄る。

「こここの桜はいくつか種類があるんだ。二月下旬から開花する河津桜と、三月下旬に開花するソメイヨシノ。その後に咲く大山桜ってのがあって、結構長期にわたって楽しめるんだ」

朱莉は無言で桜を見つめていた。

説明が聞こえていなかつたのかと思い朱莉の顔を覗く。
すると、瞳^{ひとみ}が僅かに涙でにじんでいるように見えた。

もしかしたら、沈みかけの夕日がそう見せたのかも知れない。

俺たちはしばらくの間、黙つて美しい桜を眺め続けた。

「連れてきてくださつて、ありがとうございました」

どれくらいの時間だつただろうか？

不意に朱莉がそう口にして、俺に視線を向けてくる。

「気にするな。小さい頃は毎年家族で花見に来ていたことを思い出した。おかげで俺も懐かしい気持ちに浸れたよ。たまにはこういうのも悪くないかもな」

朱莉が現れなければ、きっとこんな機会もなかつただろう。

「最後に来たのはいつだつたかな。母さんがまだ生きていた頃だから――」

思わず言いかけて、口を噤む。

「……快斗さんから、伺つています」

「……そつか」

「そりやそうか。レンタル家族の契約は俺の世話をするため。一人暮らしの男子高校生の世話となれば、母親はどうしたんだって話になるだろう。

別に隠すことでもない。

「母さんが亡くなつたのは十年前——その時のことは正直、あんまり憶えてない。その後の親父との二人暮らしが大変だつたことの方が憶えてるくらいさ。今はあんな親父だけど、当時は外資系企業で仕事をバリバリこなすエリートサラリーマンだつたらしい。母さんが亡くなつてからも親父は仕事が忙しくてな、あんまり家族らしい生活はしてこなかつた」

朱莉は黙つて俺の話に耳を傾けている。

「だからつて、別に親父に対しても思つてはゐない。おかげで一人で生きていく術はそれなりに身についた。最低限、父親らしいことはしてもらつたし感謝してるくらいさ」

「今の話を快斗さんが聞いたら、きっと喜ぶと思います」

「いやいや、ないだろ。好きに生きたくて山籠もりするような親父だぜ？」

「そう言つて笑つて見せるが、朱莉は真剣な表情をしていた。

「悪い。しんみりさせちまつたな。帰ろうぜ」

「いつ以来だらうか？ こうして自分のことを誰かに話すのは。

中学時代、まだ自分に友達と呼べる存在がいた頃、親友と呼べる仲間がいた頃ですら滅多に

話さなかつたことだ。話そそうとすら思わなかつたこと。

それを出会つて一週間の女の子に話すなんてどうかしてゐる。
自分らしくない——そんなことを思いながら帰路についた。

*

家に着いたのは六時すぎだつた。

帰り道、今日の晩飯は買つて食べようという話になり、俺は近くのお弁当屋さんに向かい、部屋の掃除をしてくれるという朱莉には、鍵を渡して先に帰つてもらつた。

俺はから揚げ弁当、朱莉の分はハンバーグ弁当を買い足早に部屋に戻る。

「ただいまー」

ただいまなんて口にするのはいつ以来だろうか？

ちょっととばかし照れくさくなりながら部屋に入ると。

「……あれ？」

先に帰つているはずの朱莉の返事がない。

おかしいなと思いながら部屋に足を踏み入れた時だつた。

「……なにしてんだ？」

思わずそんな言葉を掛けずにはいられない。

朱莉はクローゼットに頭を突っ込み、お尻だけこちらに向けていた。
「は、颯人さん——!?」

朱莉は慌てて頭を出してクローゼットを閉める。

「クローゼットの中も埃^{ほこり}が溜まっていたので掃除をしていました」
まるで何事もなかつたかのような笑顔でそう言つた。
あまりにも笑顔^{まぶ}が眩しそうに目を逸らしたくなる。

「そうか……そんなここまでやつてもらつて悪いな」

「いえいえ。これもレンタル家族としてのお仕事ですから」

てつきり俺の部屋を漁つていたのかと疑つてしまつところだつたが、頼むからそこだけはや
めてくれ。俺の秘蔵コレクションの隠し場所なんだが……バレてないよな?
そんなことを思いながら弁当と荷物を置き、思わずソファーに崩れ落ちる。

座つた瞬間、それまで感じていなかつた疲れが押し寄せてきた。
「ふう……」

「お疲れ様です。荷物を全部持つていただきありがとうございました」

「ああ、気にするな……」

たぶん、この疲れは荷物を持つていたからじゃない。

この一年間、こんなに長時間外出をすることはなかつた。一人の時は買い物なんて必要最低限だつたし、用事が済めば即帰宅。しかも可愛い女の子と一人きりなんて初めて。さらには、女の子に下着を買つてもらうという、とんだ羞恥プレイに晒さらけされてしまつたせいだろう。

……確実に気疲れだろこれ。

「お弁当を食べます？ それとも先にお風呂に入りますか？」

荷物を片付けた朱莉が部屋に戻つてきて口にする。

「あー……そうだな。先に風呂に入ろうかなあ」

風呂に入ればこの疲れも少しほまシになるだろう。

「もうお湯を張り始めています。すぐに溜まると思ひますよ

「準備がいいな。じゃあ入つてくるわ」

なんとか重い腰を上げる。

「着替えと下着は洗面所に置いておきましたから」

「なにからなにまで悪いな。ありがとう」

そう告げ、俺は洗面所へと向かつた。

「はああああ……」

風呂に入り、さつそく頭を洗いながら思わず声が漏れた。

風呂は心の洗濯とはよく言つたもので、一日の気疲れが吹き飛ぶようだ。
とはいえ、これから毎週末これが続くのかと思うとやはり気は重い。
いや、今は考えるのをやめよう。

風呂の時くらいは——。

「失礼します」

「うおおおおい!!」

いきなり風呂のドアが開き、誰かが入ってきた。

いや誰かつて朱莉しかいないんだが、頭を洗つてる最中で目が開けられない。

「なに入つてきてんだよ！」

「お背中を流しに参りました」

「はあ!? いやいやいや、風呂は別つて決めただろ！」

「安心してください。お背中を流しにきただけで一緒に入つてゐるわけではありません。どちらかといえばそれを口実に覗きにきたようなもの。ルール外のぎりぎりセーフラインです」「ぎりぎりセーフじゃねえよ！ 覗きもアウトだよ！ なんだその謎理論は！」

「これも一つの家族の形。では、失礼します」

「待て待て待ってくれ！ こつちは裸なんだ、せめて隠すものを！」

「安心してください。私も裸です」

「は……？」

「嘘だろ……？」

「……マジで？」

「嘘です」

「嘘なのかよ！」

「一瞬期待しちまつただろうが！」

「安心してください。水着です」

「水着!? ワンピースかビキニか!?

いや、この際どちらでも――。

「嘘です。普通に服を着ています」

「なんでそんな残酷な嘘を吐くんだ！」

さすがに心の声が漏れるだろうが！

「それこそ完璧^{かんぺき}にルール違反です。私としては、ルールを破つたら颶人さんが私にどんなお願いをするのか興味があるので、いつそルールを破つてしまいたいくらいですが信頼関係つて大切ですよね。ここはぐつと堪え、ルールを守ろうと思います」

「信頼関係を大切にするなら今すぐ出て行つてくれ……」「では、覚悟を決めてくださいね！」

朱莉は制止も聞かず、鼻歌混じりに俺の全身をくまなく洗つてくれたのだった。頼むから前だけはやめてくださいお願ひします。

「全くもつて休まらなかつた……むしろ余計に疲れた……」

俺が風呂を出ると、今度は朱莉が風呂に入つて行つた。

入りがけに『私は颯人さんがルールを破つても全く気にしません。家族としてのスキンシップがしたくなつたらいつでもどうぞ』と言つていたが、どこまで本気なんだろうか……。

朱莉にしてみたら一緒に風呂に入るのをルールにしようとしていたわけだから、仮に俺が自制心を失つて突撃しても、言葉のとおり気にはしない可能性が高いだろう。

いきなりルールが機能していないうんだが……風呂覗いていいとか女神かよ。なんてことを考えながら、風呂上がりにも拘らず放心状態。

「家族つて大変なんだなあ……」

本当、しみじみと実感してしまつ。

一般的な家族つてやつは毎日こんなハードなイベントをこなしているのか？

確認したいが、幸か不幸か、俺にはそんなことを聞ける友達はない。

もしこれが正しい家族のあり方などしたら、家族大勢で暮らしている奴はそれだけで尊敬できる。お一人様生活を愛する俺には、ちょっと耐え切れそうにない。

そんなことを考えている時だった。不意に部屋のインターホンが鳴る。
時計に目を向けると夜の七時すぎ。

「こんな時間に誰だ？」

そう思いながら重すぎる腰を上げ、玄関を開けた時だった——。

「うおつ——!?!」

開いた隙間からギラリと光ったなにかが侵入し、とつさにかわす。

次の瞬間、ドアの隙間から手が伸び、思いつきりドアを開かれた。
数歩下がって正対すると、そこには裁ちばさみを持った小さな女の子の姿があつた。
「だ、誰だおまえは……？」

女の子は瞳の奥に殺意を込めてこちらを見据える。

明らかに異常者に恐怖を堪えて声を掛けた。

「……んで」

「なに?」

「死んで……死んでくれないのなら、せめて切り落としてやる！」



どこの部位をだよ――！

真まつ直す直ぐ向かつてくるはさみを右にかわして相手の手首を摑む。

そのまま腕を引き、バランスを崩したところで足を掛けると相手は盛大に転んだ。床に突つ伏す女の子に馬乗りになり、身動きが取れないよう拘束する。

「どこの誰だか知らないが、とりあえず縛らせてもらうぞ」

床に押さえつけたまま、女の子が手にしていたはさみを奪う。

首からかけてあつたバスタオルをはさみで二つに裂き、暴あはれる女の子の手足を縛つた。それでも女の子は、反り返つたエビのように跳ねて抵抗の姿勢を見せる。

「解ほどけ！ この変態！」

「変態はどつちだ。いきなり不法侵入してきてはさみで切りつけるとか獵奇的すぎんだろ」

「いいから解けこのバカ！ アホ！ 切り落とすぞ童貞！」

童貞はあつてゐるが。だからどこの部位をだよ。

そんなことを思う程度に冷静さを取り戻した俺は、女の子を抱えて部屋へと放り込む。

改めて不法侵入者がどんな奴か顔を覗き込んでみると、まるで捕まつた野良犬のようなギラギラした目で俺を睨んでゐるが、よく見ればとても可愛らしい顔をしていた。

髪は短いながら柔らかそうでふわふわしていて、幼いながら整つた顔立ちに下がり目の瞳と長いまつ毛が印象的。こうして睨んでなければ愛嬌のある顔だろう。

どこか見覚えがあるような気もするが気のせいだろうか？

仕方がない。スマホを片手に警察へ通報しようとした時だった。

「とてもいいお湯でした……」

「ぶはっ！」

声が聞こえて振り返ると、そこにはお風呂上がりの朱莉の姿。

だがとんでもないことに、その体を覆うのは小さめのバスタオル一枚だけだった。
「なんで部屋着を着てこないんだ！ 今日買ったばかりだろ！」

「お風呂上がりは暑くて……すぐに服なんて着られないですよ」

どこかぼーっとした様子で顔を火照らせながら口にする。

「だからってそんな格好で出てこられても困るだろ！」

「減るものじやないですし遠慮なくご覧ください。家族なんですから」

家族がどうとかの問題じやなく、さすがに目のやり場に困る。

なんていうか、スタイル良いんだよこいつ……すらつとしていて、出るところ出ていて、それ

でバスタオルだろ？ 体のラインがもろな上に紅潮していく色っぽすぎる。

くそ……俺の中の天使と悪魔がノーガードで殴り合いの喧嘩をしてている。

お一人様とはいえ俺だつて健全な高校生。悪魔が勝利しかけた時だった。

「お、お姉ちゃん……」

すると、縛り上げていた女の子が口にした単語に、悪魔が驚きのあまり手をとめた。そこを見逃さず、チャンスとばかりに天使が渾身のアッパーで勝利したのだが。

一
え
—
零
!?

見つめ合う二人。

最悪だ……

状況を理解し、思わず頭を抱える。

思わず少女の頭をひっぱたいて叫ぶ。

「やつぱり殺す！ それがダメならせめてあなたの股間を切り落とさせて！」
「切り落とすってそこかよ！」

股間の危険を感じる俺と、驚きに言葉を無くす朱莉。

不法侵入者は、朱莉の妹だつたらしい。

この姉妹はどうなつてんだ……ああもう、今日は本当に散々だ。

「で、この変態かつ不法侵入者は、朱莉の妹で間違いないんだな？」

「はい……申し訳ありません。妹の事をご迷惑をおかけしました」

エビ反つていてる妹の隣で、ピンクの部屋着を着た姉は土下座をしている。

「一歩間違えればシャレジや済まなかつたかもしれない」

「当たり前でしょ。本気で殺すつもりだつたんだから」

「あなたはちょっと黙つていなさい」

朱莉は極寒のブリザードみたいな冷たい瞳と声音で妹を叱責する。

妹はなにかに怯えるように、顔を青白くして黙り込んだ。

「颯人さん、お怪我はありませんか？」

「大丈夫だ。とつさのこととはいえ女の子相手に失態を犯すほど間抜けじゃない。一人暮らし

をしていると、いつどこでなにが起こるかわからないからな。最低限の心得はある」

そう口にすると、朱莉は安堵の溜め息を吐いた。

「妹の不始末は姉の責任です。颯人さんが望むのならなんでもします。言葉のとおり、仰おつしやつていただければなんでも。今すぐ脱げと言われば脱ぎますし、一生お世話をしろというのなら将来いい会社に入つて養つて差し上げます。専業主夫とかいかがでしよう!?」

おかしいな。

謝っているはずなのに、後半は嬉々として提案してきたんだが。まさか朱莉はダメな男をヒモとして養いたい願望もあるんだろうか？ ちょっと将来が心配だ。

「脱がなくていいし世話もしなくていい。専業主夫には興味がない。そんな冗談はいいからとりあえず紹介してくれよ。妹じや警察に突き出すわけにもいかない。話くらい聞くさ」「あ……ありがとうございます！」

朱莉はまた全力で土下座した。

「零。あなたも颯人さんに謝りなさい」

「ちつ……死ね童貞」

暴言を吐いた瞬間、朱莉が妹の頭をひっぱたいた。

「零。次はありません。謝りなさい」

低音の感情のない声で朱莉が告げると、零は震えながら。

「ゴ メ ン ナ サ イ……」

ロボットみたいに機械的ではあるが、一応謝られたことにしておこう。

「改めてご紹いたします。この子は月夜野零。私の妹です。年は二つ離れていて今は中学三年生。その……私が言うのもなんですが、私のことが大好きな重度のシスコンなんです」

「うん。なんとなくそんな気はしていた。」

「今は実家に住んでいるのですが、どうやら私を追つてきてしまったようです」

「そういうことか」

「この子には私の新しい住所も、颯人さんのことも話していなかつたのですが……零、どうしてここがわかつたの？」

「お姉ちゃんのスマホの位置情報がわかるようにしておいたの。でもあれつて微妙にずれたりするでしょ？だからこの辺りを探してたら、お姉ちゃんがこの男と部屋に入るところを見かけて……どうするか悩んだんだけど、お姉ちゃんになにがあつてからじや遅いと思つて」「そういうことね……」

朱莉は納得しながら頭を抱える。

「結論、この男を殺してやろうと心に誓つたわ」

冗談に聞こえないからマジでやめてくれ。

やつてることがストーカーにしか思えない。

「まつたくこの子は……」

「だつて心配だつたんだもん。お姉ちゃん、私になにも言わずに急にいなくなつちやうし、やつと見つけたと思ったら男と一緒にいるし……」

半泣きで零が訴えると、朱莉はそつと零の頭に手を置く。

「黙つて出て行つたことはごめんなさい。色々ばたついていて、後でゆつくり説明しようと思つていたの。心配かけて本当にごめんなさいね」

「ううう……お姉ちやああん……」

朱莉が謝りながら頭を撫でてやると、雪は静かに泣き始めた。

「颯人さん。この子には後で私からきちんとと言ひ聞かせます。どうか今回の件について許していただけないでしようか？」

「そんな畏かしこまらなくていいって。事情がわかれればそれでいい。要は妹が姉を心配してやつてきたつてことだろ？ そこで知らない男が一緒にいれば、心中穏やかじゃないのは想像できるしな。朱莉じやないが、家族つてのはそういうもんなんじやないか？」

ましてやシンコンなら、愛情表現が過剰でも仕方がない……ということにしておこう。

「ありがとうございます」

改めて、朱莉は深々と頭を下げた。

「雪、あなた今晩はどうするつもりだつたの？」

「お姉ちゃんを見つけて一緒に帰るつもりだつたけど、もし見つからなかつたら明日も探し

と思ってホテル取つてある」

「そう。じゃあ今日はそこに帰りなさい。明日、私から連絡するわ」

「お姉ちゃんはどうするの？ この男の家に泊まるわけ？」

「そうよ。大丈夫、颯人さんは私がお風呂で背中を流しても手を出さない、とてもとても紳士的な人なの。残念だけど、バスタオル一枚で迫つても手を出さなかつたでしようね」

おかしい。全く誉められている気がしない。
むしろ男としてバカにされている気がする。

おいおい、俺が手を出さないからって舐めてもらつちや困るぜ朱莉さん。プロのぼっちはお一人様を貫くが故に、女の子との面倒なアレやコレを避けて通つてはいるだけ。

その気になつたらいつでも彼女なんて作れるし、童貞も容易に卒業できる。
ただし然るべき場所でお姉様にお金を払う、頭に疑似が付く恋愛だけどな。

「あんた不能なの？」

「不能じやねえよ！」

「じやあアレな感じの人？」

「どつちも違うわ！ なんだその哀れみに満ちた瞳は！」

どつと疲れた。

もう疲れ切った……今すぐ寝たい。

「わかつたら、もう帰りなさい」

「ん……わかつた。気を付けてね、お姉ちゃん」

「うん。大丈夫よ。またね」

そんなやり取りをして、零は朱莉に見送られて帰つて行つた。

去り際に『手を出したら次こそ切り落とす！』と言つていたが、たぶん幻聴だろう。

「なかなかぶつとんだ妹だつたなあ……」

「手の掛かる子です。あの子の面倒はいつも私が見ていたのですが、少し甘やかしすぎたみたいで。そのせいで、あのようになつてしまつて……」

「いいんじやねえの。姉妹仲が良いのは悪いことじやないだろ」

「はい」

時計に目を向けると時間は八時すぎ。

「まだ早いが、なんだか今日は疲れた……早めに寝たい」

「そうですね。では晩ご飯を食べて早くに寝ましょう」

俺たちは買つてきた弁当に手を付け始める。

それからしばらく箸を進める中、近所でパトカーのサイレンが聞こえた。
その後だった。また部屋のインター^はホンが鳴る。

「ん？ 雰^{ふみ}が戻ってきたか？」

忘れ物でもしたのか？

そう思いながら玄関を開けると、そこには一人のお巡りさんの姿。

「な、なんすか……？」

「先ほど、こちらに女子高生が拉致監禁^{らぢ かんきん}されていると通報がありました」

「……はい？」

「少々中を確認させていただきます！」

部屋に上がり込むお巡りさん。

瞬間、なにが起きているか理解した。

あのクソガキ！ 警察に通報しやがったな！

それからは大変だった。

疑いの眼差しで聴取される俺と朱莉。レンタル家族だと説明したところで理解してもらえるはずもなく、とりあえず同じ学校のクラスメイトであり、拉致監禁ではないと訴える。

お巡りさんたちも困っていたが、事件性がないとわかると帰つていた。

帰りがけ『高校生でも彼女いるのに僕なんて二十四年間彼女なしちゃよ……』『上には上がいるから気を落とすな。俺は三十年だ』『先輩、魔法使えるんすか!?』『俺は素人^{しろうど}童貞だから魔法は使えないんだ……』うん。この国の警察官は大丈夫だろうか？

二人が悲しみに包まれながら帰つた後、疲弊しきつた俺たちはソファードラッグを垂れる。

「朱莉……マジで妹のこと、なんとかしてくれ」

「はい……本当に申し訳ありません」

「……寝るか」

「寝ましょう……」

そう言つて寝室に移動したんだが。

この時、俺はとんでもないことを忘れていたことに気付く。

そうだ——寝る時は一緒にベッドだった。

全身から嫌な汗がぶわっと噴き出る。

「颯さんは奥と手前、どちらがいいですか」

「いや……別にどちらでも」

「では私が奥で寝ますね。お先に失礼します」

朱莉は平然と口にして、ベッドに横になつて布団を掛ける。ふとん

マジか……この狭いベッドで、これから一緒に寝ると?

「颯さん、どうかされましたか?」

「あ、いや……うん」

朱莉は布団を持ち上げ、おいでと言わんばかりに手招きをする。
「し、失礼します……」

なんとか隣で横になつたものの、全く落ち着かない。

におい

風呂上がりのせいか、朱莉からはシャンプーのいい匂いが漂つてくるし、微妙に肩が触れていて妙に感触を意識してしまつ。静かになると心音が聞こえそうになるほど。

やばい。この状況はヤバすぎる。股間の紳士がマーベラス。

「電気、消しますね」

「お、お願ひします」

寝室が暗闇くらやみと静寂に包まれる。

緊張のあまり全く寝られずにいると、朱莉がふと呟いた。

「颯人さん。今日はとても楽しかつたです」

「そ、そうか。それは良かった」

「不束者よつわですが、よろしくお願ひしますね」

「こ、こちらこそ……」

しばらくすると、朱莉の寝息が聞こえ始めた。

この状況で普通に寝られるとかマジかよ……いつそ不能であればどれだけ楽か。

結局この日は、朝方まで眠ることができなかつた。

*

翌日、俺が起きると時間は十時。

すでに朱莉は起きていて、着替えや化粧も済ませていた。

それどころか洗濯も済ませてくれたらしく、既にベランダに干してあつた。

「今日は零のこともあるのでこれで失礼しますね。来週からはもつとゆっくりできると思いま

す

「わかつた。零にはくれぐれもよろしく頼むよ……マジで」「はい。任せてください」

笑顔でそう答えると、朱莉は小さく手を振つて部屋を後にした。
「さてと、昨日の洗濯物でも取り込んでおくか」

ベランダへ行き洗濯物を取り込もうとすると、まだ微妙に生乾きだった。

今日は天気もいいし、もう少し干しておけば乾くだろう——そう思った時だった。

「あれ……？」

おかしい。昨日穿いていたパンツがない。

昨日、俺が風呂に入っている間に朱莉は洗濯機を回してくれた。間違いなく洗濯機に入れた記憶はあるし、一緒に洗濯をしているはずで、ここに干してなければおかしい。

洗濯籠から移す時に漏れてしまつたんだろうか？

洗面所に行って確認したが見当たらない。

そういえば、先週もパンツが一枚なくなつたばかりだ。

「もう古いからなくなつても困らないが……」

次に朱莉がきた時にでも聞いてみるか。

こうして、とてつもなく慌ただしいレンタル家族一週目は終わったのだった。

③ 変わらぬ日々と、修羅場な日々

新学期が始まつて二週目。

クラスメイトたちは徐々に新たなコミュニティを形成していく。

プロのぼっちはとつて、新学期は最も注意しなければならないイベントの一つだ。

なぜなら新しい環境というのは、誰もが積極的にコミュニケーションを取ろうとする。

普段仲良くな^{やつ}い奴や初めて顔を合わせる奴とも挨拶^{あいさつ}をしたり、話すこともないのにお目当てのグループに入ろうと、まるでトーテムポールのように傍^{そば}で立つていたり。

その裏では、お互いのポジションを賭けた牽制^{かんせい}のし合いが繰り広げられる。

『あいつどこいつはどっちが上だ?』『俺はこいつよりは上だらう』『あいつは敵に回さない方がいい』などなど、無意識のうちにそうやって上下関係を作り上げていく。

一度決まつてしまえば覆すのは難しいため、誰もが必死になる裏新学期イベント。うむ。実にくだらない。

そんな光景を我関せず眺めながら、俺は話しかけられた際、お一人様理論のもと徹底してニユートラルな対応を心掛けた。塩対応と言わないまでも必要最低限のコミュニケーション。

ie ni kaeru to
kanojyo ga kanarazu
nanika shiteimasu



そうしているうちに、クラスの連中は『あ、こいつは違うな』と思つたんだろう。
俺の狙い通り、徐々に声を掛けてくる奴は少なくなつていった。

でもまあ、傍から見たらこんな俺を可哀想だと思う奴もいるかも知れない。

だが、俺に言わせればそんなことを思う奴の方が百倍可哀想としか思えない。

必死になつて作つてゐるその人間関係が、後の人生においてどれだけ意味がある?

貴重な

学生時代を人間関係に振り回されながら無駄に過ごすなんて、どうかしてる。

しかも気付くのは大人になつてから。

同窓会なんかで言い訳のように思い出を美化するからたちが悪い。

人生の強者とは、今ではなく将来を見据えた行動をとることができるもの。

そのための孤独は、一人で生きて行く強さを身につけるための得難い経験となる。^{えがた}もし一人で過ごしてゐる同志諸君がいたら、そう胸に刻んでぼっち飯に耐えて欲しい。
未来の自分のための孤独——そう考えられればもはや勝ち組に等しい。

だが、それでもクラスに一人は物好きな奴がいるもので——。

「いってえ!」

「おつはよーう泉ヶ丘君♪^{いたた}

俺の背中を思いつきりぶつ叩き、挨拶をしてきたのは戸祭羽凪。^{とまつりはな}

三日に一度はこうして挨拶をしてくる物好きな奴だった。

クラスのムードメーカーにして、コミュニケーション能力の塊のような女子。良い意味でも悪い意味でも人を区別しない性格のせいか、こうして俺の孤独耐性をガンガン下げる。

「そんな本気で痛がらないでよ。まるでわたしが怪力みたいじゃない」

「誰だつて油断してることをぶつ叩かれたら叫びたくなるだろ」

「そつかそつか。じやあ次からは声を掛けてから叩くようにするね♪」

「順番の問題じゃねえよ。そもそも叩くのをやめ——」

「あ、おはよーう！」

話も聞かず、戸祭は他のクラスメイトのもとへ向かう。

「おはよ」

「それでもう一人、物好きな奴がいた。

「ああ。おはよう」

隣の席の築瀬みゆき。

戸祭ほどではないが、それなりに友達も多くクラスでも目立った存在。ちょっと軽めのその容姿から交友関係も軽い女子が多いが、クラスの中心人物の一人だった。

前も思つたが、どうして築瀬が俺に挨拶をしてくるのか全くわからん。この手の女子はむしろ俺みたいな奴は毛嫌いするタイプだろう。隣の席のよしみだらうか？ だとしたら、見た目に反して案外いい奴なのかもしれない。

案外こういうタイプこそ面倒見がいいなんてよくあることだ。

「みんな、おはよう」

あかり

そして聞きなれた声と共に教室に入ってきたのは朱莉。

朱莉はこの数日でクラスメイトとも仲良くなり、その存在感を増していた。二人の時は押しが強くかなりずれたところがあるが、クラスメイトに対してもそんなりとなく一般的な優等生と言つていい。クラス委員長としても頑張っていた。

美人で性格が良く、人当たりも良いとなれば男子生徒だけでなく女子生徒からも人気がでるもの当然だろう。戸祭とはまた違った意味で、周りから支持を得ていた。

だが、傍から見ている俺だから気付く——中にはそれを快く思わない奴もいた。たぶん、当人たち以外で気付いているのは俺だけだろう。

どこかで一度、朱莉に注意を促した方がいいな。

そう思いながら、自分が誰かの心配をしていることにむず痒さを感じる。

少し前の自分だつたら、わかっていても我関せずだつたのにな。

その日の放課後、俺はいつもどおり一人で帰宅をしていた。
さて、いつたいどうしたものか——歩きながら考える。

朱莉のことを快く思っていない女子生徒が数名いるのは間違いない。

女つてのは怖いよな。表向には仲良くしているんだが、相手がいなくなつたとたんに態度を変えたり、本人がいないところでえぐい悪口を言つたり。

一人でいると、そういうところに気付いたり聞こえてきたりしてしまつ。

今までだつたら気にせず放つておくんだが、朱莉となればそうもいかない。

ただ、この件について朱莉に非はないだろう。

単純に相手の嫉妬^{しつと}やつかみだ。

突然やつてきた転校生がクラス委員長に推薦されてクラスで注目を浴びていく。それを快く

思わない奴だつて一人や二人いて当然だ。転校生への洗礼と言つてもいい。

普通の奴はその辺に気を使うんだが、朱莉は根が純粹すぎて気付かない。

周りに対するアンテナが、致命的に低いように思えた。

「そういう意味では、やつぱり戸祭はすげえよな……」

本来、戸祭のように絶大な人気を誇る奴が誰からも受け入れられることはありえない。むしろ朱莉のように、一部のクラスメイトからやつかみを買う方が普通だろう。

俺もお一人様生活を始めた当初、クラスで浮いてしまつたことがあるからわかるが、普通の連中にとつて普通じゃない奴つてのは、少なからず攻撃の対象になるものだ。

ちょっとアイドルに詳しいだけで『ドルオタかよ』とか、アニメに詳しいだけで『アニオタ

キモ！」なんて言いやがる女子。『ジャニオタとなんにが違う！』と言つてやりたい。

好きなアイドルグループの推しメンやアニメキャラのグッズにかけるお金と、ドームでアイドルに黄色い声援を送るために使うお金に優劣なんてありはしない。

向き合う先が違うだけで、そこに懸ける情熱は等しく平等であるはずなのに、結局は理解されるかされないかの問題だけで普通じやない奴呼ばわりをされてしまつわけだ。

つまるところ、誰もが普通を演じ、普通の中で右に倣え、普通に囚^{とら}われて生きている。

それでいて学生らしい趣味や嗜好なんかは、個性という都合のいい言葉で褒め称^{たた}えるからタチが悪い。ふざけた青春という名の格差は広がるばかりだ。

戸祭の件でいえば、捉えようによつては八方美人だと言う奴もいるだろう。

それなのに、そんな悪口は一切ないんだから、ある意味ふざけていい。

でも俺にはわかる。どのグループにも属さず傍から眺めていた俺だからわかる。

あいつは一見なにも考えていないように見えて、実は感度の高いアンテナを常に張り巡らせ周りに合わせる努力をしている。しかも、その苦労を一切周りには気付かせない。

まあ本人が苦労していると思つてなく、素でやつっている可能性もあるけどな。

少し話がそれたが、それにしても。

「なんて伝えたもんかなあ……」

そんなふうに悩んでいた時だった。

不意に目の前に、見覚えのある姿が現れた。

「……とりあえず、その裁ちばさみをしまえ。お巡りさんの世話になりたくなきやな」
敵意全開でこちらを睨みつけているのは朱莉の妹の雪だった。

「待ち伏せしてたのか？」

「そうよ。何時に学校が終わるかわからないから、かれこれ三時間ほどね」「三時間……ご苦労なこつた。

「そいつは悪かつたな。お詫びにお茶でも奢るぜ」

「だ、誰があんたになんて奢られるもんですか！」

裁ちばさみをこつちに向けて威嚇いかくをするんだが、なんていうか犬っぽいなこいつ。

小柄でキャンキャン鳴き叫んでいて、まるでご主人様（姉）をとられて怒っているポメラニ

アンのようだ。髪がふわつふわだし。ちょっとふもふしていい？

なるほど。すぐキレるポメラニアンと思つてしまえば、別に怖くもなんともない。

人は好きじゃないが動物は大好きな俺にとつて、むしろ可愛くすら見える。

「まあそう言うなつて。なんならケーキも付けるけど」

「ケ、ケーキ……そんなものにつられる私じやない！」

なんて言いながら、空いている手で口元を拭ぬぐう。

おいおい。怒りが食欲に負けそうだぞ。

「そうか、そいつは残念だ。俺に話があつてきたんだろ？ 三時間も立たせっぱなしにして悪かつたと思っての提案なんだが仕方ない、お土産も買ってやれないがここで話そう」

「お、お土産……」

「この近くに美味しいケーク屋があつてな、そこのバームクーヘンが絶品なんだ」

零の腹からめちゃくちやでかい音が鳴った。

怒りが食欲に完全敗北した瞬間である。

「そ、そこまで言うならそうね……奢らせてあげてもいいわ」

餌付けに引っ掛かるとか、こいつマジアホだろ。

いいぞいいぞ。アホなボメラニアンは大好きだ。

「そいつはありがたい。じゃあ行くか」

「ええ。さつきと連れて行くがいいわ。そして私に奢るといいわ！」

「バカとなんとかは使いよう。

ちよつと言葉の使い方が違うが、こんなところで刃物を振り回されるよりよっぽどいい。

またお巡りさんのやつかいになる前に、零を連れて店へ急いだ。

店に着き、注文を終えた俺たちは一番奥の席に向かい合って座っていた。

俺はアイスコーヒーを頼み、零は抹茶オレにイチゴのショートケーキ。

零にも話したとおりこの店の一番はバームクーヘンなんだが、それは帰りに持たせてやると
言つたら二番人気のイチゴのショートケーキを頼んだ。

二番人気は教えていないのに選ぶあたり、犬の嗅覚^{きゅうかく}つてやつはすぐえな。
ちなみにバームクーヘンは既に購入済みで、零の隣に置いてある。

「本当にいいの？ 後でお金を払えとか言わない？」

「言わねえよ。我慢できないなら先に食べていいぞ」

「いただきます！」

お預けを食らつていた犬が『よし』と言われた瞬間のごとくケーキに貪りだす。よしと言
われるまで手を付けないあたり、多少の躊躇^{じゅうちょ}はされているらしい。

だめだ、もう俺にはこいつがポメラニアンにしか見えない。

笑いを堪えて眺めていると、二分も経たないうちにケーキは零の胃袋へ消えた。

「ごちそうさまでした！」

「はいよ。おそまつさま」

口の周りがクリームだらけのは愛嬌^{あいきょう}だろう。

俺は紙ナプキンを片手に手を伸ばし、零の口を拭いてやる。

「ん……ありがと」

「どういたしまして」

ちゃんとお礼を言えるあたり、根は良い子なのかもな。

「それで、今日はどうしたんだ?」

そう尋ねると、零は少し俯うつむきながら呟つぶやく。

「その……この前は、お巡りさんに通報してごめんなさい……」

まさかの言葉を口にした。

「おいおい、どうしたんだ? 今日はひどいぶん素直じゃねえか」

「お姉ちゃんに怒られたの……ちゃんと謝りなさいって」

ああ、そういうことか。

この前の感じを見るに、零は朱莉に怒られるのが相当苦手なんだろう。

俺のことを毛嫌いしているはずなのに、朱莉に怒られたとはいえ謝りにくるなんて案外素直
というか、可愛いところもあるじゃないか。

「気にするな。大好きなお姉ちゃんが知らない男と一緒にいれば、変な気を起こしちまう気持
ちもわからなくはない。やりすぎな気もするが妹としては正しい行動なんじやねえの?」
「知ったふうな口をきかないで。私が今日きたのは謝るためだけじゃない」

一転して顔色を変える。

「お姉ちゃんから全部聞いたわ。レンタル家族契約を今すぐ解消して」

口調は重く、瞳^{ひとみ}は鋭く、明確な敵意を向けてくる。

右手をバッグの中に入れているのは、裁ちばさみを取り出すためだろう。

零がいかにウルトラダイナミックなアホの子でも、こんなところで変な気を起こすとは思えない。これは警告の意味を込めた意思表示と捉えるべきだろう。
解消しないのなら、容赦はしないと。

「…………」

しばらく無言で見つめ合い、俺は大きく溜め息を吐いた。

「本音を言えば、解消できるものならしてやりたいさ」

「…………意味よ」

「聞いてるかもしれないが、レンタル家族契約は俺が決めたことじゃなくて、朱莉と俺の親父の間で決められたことなんだ。言つてしまえば朱莉と親父が結んだ契約で、俺の意思だけじゃどうにもならん。俺も朱莉に解消を提案したんだが断られたよ」

「…………」

「だから、どうしても解消させたいならお姉ちゃんに言つてくれ」

俺が答えると、零は困った様子で俯いた。

「何度も言つたわよ……でも、ダメだつたからあんたに会いにきたのに……」

そう呟く声は、僅かに震えているようだつた。

そりやそうか。零が朱莉をとめないわけがない。

「悪いな……期待に応えてやれなくて」

行動がエキセントリックすぎるだけで、零なりに姉を心配してのこと。

そう思うと、少しだけ零が可哀想に思えてしまった。

「わかつたわ」

すると不意に、覚悟を決めたような口調で話し出す。

「契約が解消できないのなら、強制的に無効にするまでよ……」

低く響く声に、全力で嫌な予感がした。

瞬間、零はバッグから裁ちばさみを取り出して叫ぶ——。

「あんたを殺して私も死ぬわ！」

「どこの昼ドラのヒロインだおまえは！」

店内の店員とお客さんが一斉に俺たちに視線を向ける。

俺は慌てて零を^{かづ}担ぎ上げ、レジに札を置いて一目散でケーキ屋から飛び出した。
お釣りを貰つてる暇なんてなかつたよ。

「つたく……場所を選べ場所を……」

零を担いだまま近くの公園まで全力ダッシュした俺は、息も絶え絶えにぼやく。気が付けば辺りは日が落ちて薄暗く、公園の灯りがつき始める時間だった。

「こうなつたらもう、最終手段よ……」

疲れ切った俺をよそに、零はまた決意に満ちた瞳を向ける。

「もう私には、二人の契約を解消させることはできない。だから――」

上げた顔は、全てを覚悟した人間のそれだった。

「なつ――!?」

不意に零は着ていた制服のシャツのボタンを全て外す。

その場にシャツを脱ぎ捨て、パステルカラーの黄色い下着と姉ほど豊かではない胸元が露わになる。透き通るような白い肌が、こんな暗闇でさえはつきりと浮かんでいた。

なにしてんだ――!?

とめようとする間もなく零が叫ぶ。

「私があなたの犬になるわ――！」

夜の公園にとんでもない言葉が響き、俺の思考がとまつた。

とめようと伸ばした手が、摑みどころを失って宙に浮かぶ。

「あんたが望むなら、犬でもメイドでも性奴隸でもなんでもなる！ だから、お願ひだからお

姉ちゃんの処女だけは！ 処女だけは堪忍して！ 私が代わりに全てを捧げるわ！」



かつてないほど深い溜め息が出た。

「私は……本気よ！」

零はそう口にすると、俺の手を掴んで自分の胸に押し当てる。小さいながら下着の上からでも柔らかな感触が手のひらに伝わってくる。だが、初めて女の子の胸を触った感触を喜ぶような気分にはなれなかつた。

「おまえなあ……」

いい加減にしろよ。このバカが……。

その覚悟があまりにも斜め上すぎて、呆れを通り越して怒りすら覚える。

俺は胸から手を離し、ふざけたことを口にする零の頬を掴んだ。

「そういう台詞はな、本気でも言つちやダメだ」

「むぐう……」

俺は思いのほか真剣に言つていたらしい。

零は驚いた表情で押さえられた口をパクパクさせながら黙り込む。

「おまえが本気で姉ちゃんのためを想つて言つてるのはわかる。だけどな、言つていいことと悪いことがあるだろ？ おまえの提案を俺が受け入れたら姉ちゃんはどう思う？」

零は眉をひそめて目を逸らす。

「私の代わりに全てを捧げてくれてありがとう、なんて言うと思うか？ 自分を大切にできな

い奴が、相手を大切にしてやれるはずないだろ」

自分で言つておいてなんだが、大切な人なんていない俺が言つても説得力ゼロだろ。だが、俺の事情なんて知らない零にとつては、それなりに効いたらしい。

「……ごめんなひやい」

口がタコさん状態のまま、小さく呟いた。

「神に誓つて朱莉に手を出すことはない。どちらかといえば俺の方が手を出されるような気がしなくもないが、全力で逃げ切つてみせる。だから心配するな」

後半の言葉はいまいち伝わらなかつたみたいだが、零は小さく頷いた。

大人しくなつた零に安堵し、ポケットからスマホを取り出して朱莉にかける。

『はい。朱莉です』

「悪いなこんな時間に」

『いえ、どうされました?』

「実はな、零が訪ねてきて今一緒にいるんだ。悪いけど出てこられるか?』

『わかりました。すぐに伺います』

朱莉に居場所を告げて通話を切る。

それから朱莉がくるまで俺たちはベンチに座つて待っていたが、朱莉が到着するまで零が口を開くことはなかつた。

朱莉がきたのは二十分後。

朱莉はくるなり零に厳しく言い放った。

「零、また颯人さんにご迷惑をおかけしたの？」

「ああ、いや、違うんだ」

「違う？　なにがでしよう？」

「零は俺に謝りにきたんだよ。それで話し込んで、いい時間になつちまつてさ」

そう説明すると、朱莉は納得したようだつた。

かなり端折つてはいるが、概ね間違いはない。

「今日は朱莉の部屋に泊めてやれないか？　明日の朝一で帰れば学校にも間に合うだろ」とすると、朱莉はなにかを察したんだろう。

「……わかりました。零、一緒に帰りましょう」

朱莉が声を掛けると零は小さく頷き、朱莉に抱き付いた。

「颯人さん、ありがとうございました」

「別になにもしてないけどな」

俺がそう答えると、零がなにか言いたげに見つめてくる。

「諦めないから……絶対に」
あきら

「おう。せいぜい頑張つてみな」

「ただし、やり方は間違えるなよ——とは今さら言う必要もない。

「颯人さん、本当にありがとうございました。今日はこれで失礼しますね」

「ああ——いや、ちょっと待つてくれ」

「雪を連れて帰ろうとした朱莉を呼びとめる。

「なんでしょう?」

「こんな時にする話でもないんだが、ちょっとだけいいか?」

「はい。もちろんです」

「俺は朱莉を連れ、雪から少し離れたところで口にする。

「あのさ、クラスメイトたちについてなんだが……」

「なんて言うべきか。

「散々考えたが、オブラーートに包んだ言い方が見つからない。

「いや、ここで濁しても仕方がないだろう。

「気を悪くしないで聞いてくれ。たぶん、朱莉のことを快く思っていない奴がクラスに少しいると思うんだ。だから、立ち回りについて少し気を付けた方がいい。なんていうか……朱莉はクラスに馴染んで上手くやつてるだろ? そういうのを妬ましく思う奴もいる」

すると朱莉は小さく頷き。

「心配をしてくださつてありがとうございます。ですが大丈夫です」
思いのほかあつさりと笑顔でそう答えた。

その笑顔に、僅かに違和感を覚える。

伝わらなかつたんだろうか？

「颯人さん、私からも一つ、お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「え？ ああ、なんだ？」

「失礼なご質問かもしけれませんが……颯人さんはクラスで孤立をしているように見えます。私が知つてゐる二人の時の颯人さんは明らかに違うので、少し気になつています」
一瞬、戸惑つてしまつた。

いつかは聞かれるだらうとは思つていたが、まさかこのタイミングだとは。
いや、唐突なのはお互い様か——。

「俺はさ、高校に入つてからずつと一人ですごしてきただ」

隠すことなく話そつと思つた。

「色々あつてさ、人とつるんだり群れたりすることを避けてきた。友達ができるないんじやなくて、作らないだけつて言つたら強がりに聞こえるかもしれないが、事実、あえて作らないよう周りと接してきた。一人でいる方が気楽つてのもあつてな」

朱莉は黙つて俺の言葉に耳を傾け続ける。

「去年一年間はそんなふうにすごしていたから、クラスの連中もあえて俺に絡んでこようとはしない。俺はそんな現状に満足しているし、これからも友達を作るつもりはない。朱莉からしてみたら異常に見えても仕方がないかもな」

一通り説明を終えると、朱莉はなんとも言えない表情をしていた。

「ありがとうございます。お話を聞いてください」

そう言つて深々と頭を下した。

朱莉は頭を上げると零に歩み寄り、その手をそつと握る。

「帰りましょう—— 鳴人さん、失礼します」

「ああ、ちょっと待つてくれ」

俺は手にしていた紙袋を零に渡す。

「ほれ。約束のバームクーヘンだ。朱莉と一緒に食べな」

「……ありがとうございます」

零は紙袋を受け取ると、朱莉の背中に隠れた。

「では失礼します。おやすみなさい」

「おやすみ……」

公園を後にする二人を見送る。

少しだけ、複雑な思いだつた。

自分が一人でいる理由を、こうして誰かに話したのは初めてのこと。
この気持ちはなんだろう。言葉で形容できない複雑さが胸を締める。

「ん……？」

その時だつた——暗がりの向こうに、人影のようなものが見えた気がした。
目を細めて辺りを見渡すが誰の姿も見えない。

「気のせいか……」

やつぱ疲れでんのかな……。

そんなことを想いながら、部屋に帰つたのだった。

*

そして金曜日。明日は朱莉がやつてくる週末。

このくらいの時期になると、ほぼクラス内でのグループが決まる。

特に顕著なのは女子——うちのクラスでは、大きく二つのグループに分かれていた。

一つは朱莉を中心とする、比較的真面目な女子のグループ。

転校生でクラス委員長というポジションは多くのクラスメイトから人気と信頼を集め、気が

付けば周りに人を集めて中心人物となつていた。

もう一つは俺の隣の席の築瀬を中心とする、やや軽めの女子グループ。

化粧が派手でノリが軽く、今時の女子高生と言うべきか？ 正直、俺の得意ではないタイプの女子の集まり。座り方が雑で普通にパンツとか見えてるのはサービスだろうか？ 煩惱にまみれた男たちにパンツを見せてやることで、内に秘める欲求を発散させ性犯罪の低下に貢献しようとしているのだとしたら、彼女たちの献身性に頭が下がる。

それはともかく、お察しのとおり、二つのグループはあまり仲が良いとは言えない。

朱莉のことを快く思っていない女子生徒がいるのも後者のグループだった。

ちなみに男たちは俺を除いて皆仲が良く、バカ話で和気あいあいとしている。

そんな中、俺は一人複雑な思いを引きずつていた。

理由は言うまでもない——この前、朱莉に尋ねられた件について。

同じクラスならいざれ疑問を持たれると思つていていたし、その時は話そうと思つていたこと。だが、話したことを思つた以上に気にしている自分がいる。

一人の時には、こんな気持ちにならなかつたのに——。

「おつはよーう泉ヶ丘君♪」

「ぐはっ！」

やつぱり背中をぶつ叩かれた。

「戸祭……頼むから挨拶の度にぶつ叩くのはやめてくれ。そのうち折れる」

「今日はちゃんと挨拶してから叩いたでしょ？」

「いやだから、順番の問題じゃないんだって……」

切実に訴えると、戸祭はぶりっこ全開で『ゴメンゴメーン♪』と口にした。
謝らなくていいから叩かないでくれ。

「さつきからぼーっとしてるのはいつものことだろ？」

「俺がぼーっとしてるのはいつものことだろ？」

「そう？ ジヤア虚ろな顔して誰を見つめてたのかな～？」

からかうような笑顔を浮かべながら俺の顔を覗き込む。

「……気のせいだろ」

近い。近すぎる。ちゅーされても文句言えない距離だぞおまえ。

それはともかく、無意識に朱莉を目で追つてしまっていたんだろうか？

俺は何事もなかつた素振りで視線を窓の外に向ける。

「ねえねえ泉ヶ丘君」

「なんだ？」

至つて冷静に返す。

お一人様理論その② 周りに対しては常にニュートラルに。

そう自分に言い聞かせ、平常心を取り戻そうとした時だった。

「日曜日、わたしとお出かけしない？」

「ぶはつ——！」

取り戻しかけた平常心が碎け散った。

「……誘う相手を間違えてないか？」

散らばつた平常心を慌ててかき集め、努めて冷静に返す。

「間違えてないよ？ つまりね、わたしとデート——」

戸祭が致命的な単語を口にしようとした瞬間、俺は遮る^{よのさえ}ように大きな音を立てて席を立つ。

「悪いな。他を当たつてくれ」

その場を立ち去ろうとした時だった。

戸祭は俺の耳元をくすぐるように呟く。

「月夜野さんのことについて、お話をしたいんだよねえ♪」

思わず足をとめてしまつたことを後悔した。

リアクションを示してしまつた時点で、もはや言い訳は通用しない。

振り返ると、戸祭は意味深な笑顔を浮かべて俺を見つめている。

俺に残された唯一のお一人様生活——平穏な学校生活が、終わる予感がした。

昼休み。俺はいつものように屋上に来ていた。

「戸祭の奴、なにを考えてんだ……」

以前から掴みどころのない奴だとは思っていたが、こんなことになるとは。思わず空を見上げる。

雲一つなく嫌になるくらい美しい青空が広がっていて、まるで俺の心境をあざ笑うかのようで恨めしい。新学期が始まつてからトラブルばかりだ。ちくしょう。

「愚痴ついても始まらねえか……」

戸祭が口にした『月夜野さんについて、話がしたい』という言葉。

今はその意味するところについて考え、対策を取らなければいけない。

いや、意味なんて考えるだけ無駄だろう。

この場合、想像しうる最悪を想定しておくべきだ。もし戸祭の言葉の意味がそれ以外だとしたら、むしろ全裸で小躍りしながら喜んでいいレベル。

そして想定しうる最悪とは——俺と朱莉の関係についてだろう。

「でも仮にそうだとしたら、どうしてバレた?」

焦りと、不安と、混乱と……様々な感情が頭の中をぐるぐる巡る。

一年間かけて築き上げてきた理想のお一人様生活。

それがまさか、こんなに早く終了の危機を迎えることになるなんて。いや、違うか……それはもうすでに、朱莉が現れた時に終わっている。

だからこそ、学校内での立ち位置だけは死守したかった。

戸祭と同じクラスになつた時に注意を払おうと思っていたのに、それを怠つたのはレンタル家族契約に意識を取られていたせいだ。

リスク管理が甘かつた——そんな後悔をしている時だった。

屋上に昇つてくる複数の足音が聞こえた。

「なんですか？　お話つて……」

聞きなれた声に耳を疑う。

身を隠して窺うと、そこには朱莉と見慣れない男子生徒の姿があつた。

「突然こんなところに連れ出してごめん。どうしても伝えたいことがあるんだ」

男子生徒は真剣な表情で口にする。

その光景は、今まで何度も目にしてきた青春のワンシーンだつた。

「君のことが好きなんだ。付き合つてもらえないかな？」

男子生徒が口にした言葉は、おおよそ想像どおりだつた。

朱莉は驚いたように「元を押さえる。

少しして、朱莉は深く頭を下げた。

「ごめんなさい。あなたとお付き合いはできません」

「どうして？ 好きな男でもいるの？」

その問いに朱莉は一度目を伏せた後、相手を真っ直ぐ見つめて口にする。

「——はい」

その言葉に、どうしてか胸が痛んだ。

朱莉が返事をすると、男子生徒は無言でその場を後にする。

しばらくすると朱莉も屋上を後にし、俺はその背中を見送った。

そして、一つの考えが頭をよぎる。

——本当に、レンタル家族契約を継続していいんだろうか？

周りにバレるリスクだけじゃない。

俺が元の生活に戻りたいというだけじゃない。

朱莉の今後の生活を考えれば、よくないんじやないか？

「好きな人がいたつて……俺と一緒にいたら、まずいだろ……」

お一人様生活は、自分が自由になれるだけじゃない。
誰にも迷惑をかけなくてすむ——だからこそ俺は、一人でいたのに。
もはやそんな生活とは、ほど遠いと思わざるを得なかつた。

4 望まないデートと、暴かれた秘密

土曜日の朝、朱莉はいつものようにやつてきた。
あかり

「今日は特に予定はありませんね」

「ああ。そうだな」

こうして話をするのは、雪しゆくを迎えてもらつた時以来。

お互いに少し気まずい話をしまつたんだが、朱莉は特に気にした様子もなく学校では見
せない二人きりの時の笑顔を向けてくれる。

俺われがどうして一人でいるようになつたのか？ 朱莉はきっと、その理由を気にしているは
ずだ。それでも聞いてこないのは、氣を使つてくれてているからだろう。

その気遣いが、今は少しだけありがたい。

「たまにはお部屋でのんびりしましよう。それもまた家族のすごし方の一つです」

そんな話をしながら、二人並んで源さんに餌をあげているんだが……。

どうしてだろうか？ 朱莉の距離が不必要に近い気がする。

「あ、あのさ……ちょっと餌をあげづらいんだが」

ie ni kaeru to
kanojo ga kanarazu
nanika shiteimasu



「でしたら私があげましょうか?」

「いや、そうじゃなくてな……」

あげづらい理由を全く理解していないのか、さらに近づいてくる。もはや密着しすぎてほっぺが触れそなんだが……。

いや、意識するな。意識をしたら負けな気がする。

にしても、朱莉は好きな人がいると言っていたのにいいんだろうか?

仕事とはいえ男の部屋に上がり込み、一緒に寝て、こんな密着状態でいるなんて。

よくはないよな……朱莉に彼氏ができたとして、もし俺がその彼氏だとしたら絶対嫌だ。

今後の生活について、その辺りも機会があれば話しておきたいんだが、今はそれどころじゃない。それよりも優先すべき問題が目の前にある。

それは明日に控えた戸祭とのお出かけの件。

果たして、どこまで朱莉に話すべきか——?

「あの……はやと颯人さん?」

「ん? どうした?」

気が付くと、朱莉が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「源さん……もうお腹なかいっぱいみたいですよ?」

「え?」

源さんに目を向けると、俺のあげた餌を食べすぎて丸太のように横たわっていた。

「源さんごめん！ 大丈夫か!?」

可愛い前足を上げてフリフリしながら大丈夫とアピール。

源さんは餌をあげるとあげた分だけ食べてしまつたため普段は量を抑えていたが、考え事をしていたせいか過剰に与えすぎてしまつたらしい。

過去、餌をあげすぎて異常に丸々と肥えてしまつたことがある。

それはそれで、とても可愛かつたんだが健康的とは言い難い。

颯人さん、どうかされましたか？ 心ここにあらずといったようですが

心配する朱莉に、俺は努めて明るく返す。

「いや、なんでもない。最近、親父の動画更新が遅いからどうしたのかと思つてな」

「そうですか？ いつもどおり、週に一度はアップされているようですが」

「あれ？ そうか？ 見落としていたのかもしれないな。どれどれ」

本当は既に視聴済みだつたが、適当なことを言つたのがバレないようスマホを手に取り親父の動画を再生し始めた。

『ブツシユクラフト親父の日常。シーズン2——第二話 水の確保』

今週は、生活を支える生命線ともいえる水の確保について。

飲み水だけでなく、料理や風呂^{ふろ}、作物を育てるためにも必要であり、容易に水の確保ができる

ない山奥ではいかに効率よく確保するかがとても重要らしい。

今回取った方法は、川から直接ホームキャンプまで水を引く方法。

まずは膨大な量の竹を集め、半分に切つて節を削り、植物のツルで繋ぎ合わせる。

それを近くの川の上流からホームキャンプまで数十メートルにわたって設置。上流から下流への流れと高低差を利用し、竹をつたつて水が流れてくる仕組みを作り上げた。

めちゃくちや長い流しそうめん用の設備と言えばわかりやすいだろうか？

シーズン1の動画では粘土を焼成して作ったツボを使つて水汲みをしていたが、移動距離や

重い水を運ぶコストを考えれば、極めて効率的なシステムと言つていいだろう。

だが、歓喜しながら半裸で水浴びをするおっさんの「画ヅラはどうかと思うぞ。

そしてラストはお決まりのルーティン。キメ顔横ピースで終了。

再視聴ということもあり、動画をほとんど見ずに考えていた。

戸祭の件について、今はまだ朱莉に話すべきじゃないだろう。戸祭の話が必ずしも俺の想像

通りとは限らない以上、可能性の話をするのは不必要に朱莉を心配させるだけ。

まずは戸祭の出方を窺い、話を聞いてから——。

「なあ、朱莉」

「はい。なんでしょう？」

俺は腹を括つて話しかける。

「明日なんだが、ちょっと所用で出かけることになつたんだ」

「そうですか。もしご迷惑でなければ私もご一緒しましようか?」

「いや、帰りが何時になるかわからないから部屋で待つてくれ」

「わかりました。お留守番は任せてください」

結局この日は一日、なにも手に付かず終わってしまった。

*

「颯人さん」

「……ん」

自分を呼ぶ声に、意識が引っ張られた。

「颯人さん。起きてください」

朱莉の声が聞こえる。

今日は日曜日だろ……もうちょっと寝かせてくれ。

昨夜は朱莉に腕をつかまれて妙な感触を味わつたり、腕を引っこ抜いたらパジャマのボタンが全部とれていて見ちゃいけないものを見てしまつたり、興奮しすぎて寝てないんだ。相変わらず朱莉は風呂を覗きにくるし……あつちもこつちも疲れてるんだよ。

「あと三十分……むぐう！」

両手で思いつきりほっぺをムニムニされた。

無言の抵抗。そんなことをされても起きないぞ。

「いいんですか？」今日はお出かけですよね？」

瞬間、一気に頭が覚醒する。かくせい

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

目を開けると同時に、全力で叫んでしまった。

近距離に迫る朱莉の顔。近すぎてピントが合わず理解するまで一瞬パニック。

「近い！　どうしたい？！」

「何度も呼んでも起きないので、近くで呼べば起きるかと思いまして」「にしても近い！　一步間違えれば事件だつたぞ！」

目覚め方次第じゃ俺の唇が奪われる距離だった。

「ずいぶんごゆつくりですが、お出かけの時間は大丈夫ですか？」

時計に目を向けると、時計は十時を回っていた。

やばすぎる——慌てて飛び起き着替え始める。

待ち合わせはショッピングモールに十時半。

着替えながら、移動手段と到着時間を計算する。

この時間ではちょうどいいバスはない。次のバスを待てば十分以上の遅刻だろう。
あれば自転車か？ 信号次第だが、遅くとも二十五分あれば着く。どちらにしても遅刻だ
が相手を待たせている以上、一分でも早く着かなければならない。

着替えを終え、ウォーターサーバーの水を一杯飲み干し——。

「行つてくる！ 帰る前には連絡するから！」

「いつてらっしゃい。お掃除や洗濯は済ませておきますね」

朱莉に見送られながら部屋を飛び出し、階段を下りたところで足がとまつた。
そうだ、洗濯といえば俺のパンツがなくなつたこと、まだ聞いてなかつた。

時間はヤバいが憶えているうちに聞いておいた方がいい。

俺は一度部屋に戻り、玄関を開けた時だつた。

「はあああ……」

俺は幻視でも見ているんだろうか？

目の前には、見覚えのある光景が広がつっていた。

「はあああああ……」

部屋の中には床に座り込んでいる朱莉の姿。

どうしてか、俺のパンツを顔に押し当てる恥ましい声を上げていた。

「あ、朱莉……なにしてんだ？」

声を掛けると、朱莉は不意に満面の笑みを浮かべ。

「あら？ タオルと間違えてしまつたようです」

「そ、そ、うか……間違えちゃつたか」

思わずそう返してしまつたが、そんなことがあり得るだろうか？

洗濯機の中に入れておいたはずのパンツだぞ？

「颯人さん、お時間がなかつたのでは？」

朱莉に言われてハツとする。

「そうだ！ こんなことをしている時間はない！」

「とりあえず行つてくる！」

慌てて部屋を飛び出す。

「……ふひひっ」

出掛けにゲスい声が聞こえた気がしたが、今はそれどころじゃない。

結局、行方不明になつたパンツ二枚のことは聞けなかつた。

全速力で自転車をこいだが、到着したのは約束の時間の五分後。駐輪場に自転車を投げ捨て、走つて待ち合わせ場所に向かう。

「戸祭も遅れてくれればいいんだが」

このショッピングモールはシュガーモールという呼称で、地元で一番人が集まる場所。敷地内には家電量販店や映画館、温泉施設なんかもあり、年齢問わず楽しめる場所が揃つていて。その中でも珍しいのが、アルパカ広場と呼ばれるスポット。

名前の通りアルパカと触れ合える広場なんだが、ここを待ち合わせ場所にする男女は多く、俺と戸祭の待ち合わせ場所もこのアルパカ広場だった。

「急がないと——」

向かう途中、ふと辺りを見回した時だった。

「え……？」

モール前のエントランスに立っている女性を見て目を疑つた。

「駒生先生……？」

普段目にしているスーツ姿ではなく私服。しかもなんていうか、一言でいうなら昼間なのに夜の店の人みたいな派手な格好で、サングラスしてるから一瞬誰かわからなかつた。

「ん……おまえは泉ヶ丘か？」

名前を呼んでしまつたのが失敗だつた。

駒生先生は俺に気付き、サングラスを外しながら近づいてくる。

「おまえみたいな奴^{やつ}が休日にこんなところにくるなんて珍しいな」

「おまえみたいな奴がって……駒生先生、俺のことなんてそんな知らないでしょ」「担任教師を舐めるなよ。一週間もすればだいたいわかるさ」

本當かよ。そんな根拠のない理解の仕方をされても困る。

「……女か？」

駒生先生はニヤリと笑いながら口にする。

「なんでそういう思うんですか……？」

「その慌てようにして、この先は男女の待ち合わせスポットのアルパカ広場。かくいう私も男性を待っているのだ。なにを隠そう、今日は婚活アプリで出会った男性とデートなんだ！」
「はあ……」

いや、その格好をみれば嫌でもわかりますよ。

無駄に胸元開けすぎじゃないですかね？ おっぱい見えてますよ？

「しかしまあ、おまえが女と待ち合わせとはな」

「駒生先生こそ、シュガーモールで待ち合わせなんてちょっと似合いませんね」

「ここは大人のカップルよりも家族連れや学生の方が多いはず。

「そう言ってくれるな。私だってここよりもインターシティの方がよかつたさ」

「インターリシティというのは市内の南にあるもう一つの集合商業施設。

百貨店と専門店が併設されたところで、ブランドショップやセレクトショップも入っている

ため社会人が多く集まる場所。ここよりも少し客層が上のイメージ。

「待ち合わせ場所をここにしたのは、今日の相手が地元の大学生だからだ」「大学生!?」

「地元の大学に通うなかなかにイケメンの四年生だ。来年には社会人、相手の卒業とともに入籍すれば早くてあと一年。これでようやくクソガキどもの相手から解放される。三十歳手前でチャンスがやつてくるとは婚活の神も私を見放してはいなかつた!」

駒生先生は嬉々として語る。

婚活の神ってなんだよ。そんなのがいたら、とつぐに結婚できるんじゃないですかね。もしくは今の今まで売れ残っている事実から、神に見放されているんだと思います。

そんなこと言つたら殺される。

「今日のためにわざわざクソ高い下着も新調したんだ……ふふふつ今日は帰さんぞ」目が完全に獲物を狩るハンターのそれ。

相手もよく七歳も離れた相手と会う気になつたな。まあどうせ、年上なら後腐れなくワンチャン狙い!^{ねら}とか思つてんだろうけど相手が悪い。アラサー女の執念を舐めすぎだ。

責任とつてちゃんと引き取ってくれよマジで。

「休み明け、お互いにいい報告ができるよう頑張ろうじゃないか!」

駒生先生は上機嫌で俺の肩をバシバシ叩く。

どうぞ勝手に頑張ってくださいね。駒生先生に一礼し、その場を後にする。時間を無駄にしてしまったが、アルパカ広場に着くとまだ戸祭の姿はない。ほつと胸を撫で下ろした時だった。

「おっそーい♪」

突然、背後から両方のほっぺをつままれた。

驚きながら振り返ると、そこには笑顔を浮かべる戸祭の姿があつた。

「泉ヶ丘君は女の子を待たせて喜ぶタイプの男の子なのかな？ ちょっと趣味悪いぞ♪」

相変わらず悪戯っぽい笑顔で冗談ぽく口にする。

いつも教室で見かけるその笑顔に、俺は少しだけ冷静さを取り戻した。

「待たせて喜ぶタイプどころか、待たせる機会すらなかつたタイプだ。悪いな、誰かと待ち合わせするなんて数年ぶりで昨日は寝つけなかつた。単純に寝坊だ」

そう答えると、戸祭は腹を押さえて笑つた。

「普通は言い訳の一つでもするところでしょ？ 濑い男子は嫌いじゃないけどさ」

「そいつはどうも」

「じゃ、とりあえず中に入ろつか♪」

戸祭に手招きされ、俺たちはシユガーモールの中に入つて行く。

モール内は日曜日ということもあって、学生や家族連れで賑わっていた。

「すげえ人だなおい……」

人生ソロプレイの俺には、酔つてしまいそうな人の数だった。
どうしよう。今すぐ全力で帰りたい。

「今日は少ない方だと思うけどなー」

「マジかよ。普段は来ないからよくわからん」

「え？ 友達と来たりしないの？」

「友達なんていないの知ってるだろ？ それとも悪口で言つてんのか？」

「これはこれは、失礼しました♪♪」

戸祭は明らかにわかっていて言つたんだろう。

からかうような笑顔で謝つた。

「おまえくらいだよ。俺に話しかけてくるのは

「あれ？ もう一人いるでしょ？ 隣の席の築瀬さん

本当、こいつはよく見てやがる……。

「でもさ、なんでみんな泉ヶ丘君に話しかけないんだろ。わたしからしてみたら泉ヶ丘君で
めつちや面白い人なんだけどな。なかなかあそこまで一人でいられる人いないよ？」

「おまえ、それはさすがに悪口だろ」

「半分ね。でも半分はホントに興味があつたんだ。でもさ、あそこまで徹底して一人でいられ

ると、なんか話しかけるのも悪い気がしてくるじゃん？ 好きでやつてるんだろうし
こいつは本当、どこまでわかつて言つてるんだ？

いつも笑顔でいるため、ある意味それ以外の表情がないという意味ではポーカーフェイスとも言える。記憶を遡さかのぼつてみると、戸祭が笑つていてる以外の表情を見た覚えがない。

「今日は周りに遠慮なく、泉ヶ丘君と話せるチャンスだからね」

「最初で最後のチャンスになることを願う。で、どこで話す？」

「せつかくだから色々見たいお店あるの。付き合つて♪」

「は？ いやちょっと待て——」

「……ダメなの？ 今日楽しみにしてたのに」

泣きそうな顔で瞳ひとみを潤ませながら、俺の服の袖そでをつまみながら訴える。

まるで捨てられた子猫が通りすがりの人に対するかのように。

「いや……ダメってわけじゃないが……」

「やつたー！ ジヤあ行こう♪」

「おい……」

次の瞬間にはケロッとして歓喜の声を上げた。

くつそ……引っ掛かる俺もアレだがずるいだろそれは！

他の男どもが戸祭のあざとさにやられるのが、少しだけわかつた気がした。

「おーい！ 早くー」

「へいへい……」

「おいでくよーー！」

わかつたから、そんな大きな声で呼ばないでくれ。

他のクラスメイトに会つたら余計ややこしくなる。

その時の言い訳を考えながら後を追つた。

その後、戸祭に連れられてほぼ全てのアパレルショッピングを見て回った。

なんでも一足早く夏物の洋服を見たかつたらしく、あつちに行きこっちに行き、試着をしては戻し「買わない」と言つたくせに後から『もう一度着てみたい！』と店に戻り……。気が付けば買った洋服はかなりの数になつていて、それを全て持たされる俺。

こいつ、もしかして荷物持ち代わりに俺を誘つたんじゃないか？
そんなの取り巻きのペットたちに頼めよ。喜んで付き合うだろうが。

結局、戸祭の買い物は三時間に及び、コーヒーショップに入つたのは一時半だった。

「おまえなあ……いくらなんでも買いすぎじゃねえの？」

戸祭の隣に山のように積まれた紙袋を眺めながら嘆息する。

「そう? このくらい普通だよ?」

十を超えるショップの買い物袋が普通だと?

俺の五年分くらいはあるぞこれ。

呆れる俺の前で、戸祭は満足そうにアイスカフェオレを飲んでいた。

「そういうえばさ、泉ヶ丘君とは一年の時から同じクラスだよね」

「情報技術科は二クラスしかないんだ。クラス替えたって半分は元クラスメイト。五十%の確率なんだから別に珍しいことでもないだろ」

「そうなんだけど、わたしが言いたいのは一緒だったのにちゃんと話すのって初めてだなーってこと。ずっと一人でいるけど、泉ヶ丘君て誰かと一緒にいると死んじやう人なの?」

「そんな病気の奴なんていねえよ」

こいつ、本当に聞きづらいことを遠慮なく言つてくるな。

悪意がないのはわかるが、ここまで踏み込めるのも凄い。

「別に……その方が単純に気楽ってだけさ」

「そんな感じはするよね。別に人付き合いを避けてるわけじゃなくて最小限って感じだし、話しかければ普通に答えてくれるし。友達ができないんじやなくて作らないだけって印象……改めてこいつは面倒だと確信した。

一見アホのように見えて、まあ本当にアホなんだけど、あざといながら周りに気を配るタイ

「普段の行動からわかる。そうすることで、自分と相手の距離を測っているんだ。

わかつてはいたことだが、こうして対面すると思いのほか面倒くさい。

「なにか一人でいたくなるような嫌なことでもあったの？」

「…………」

ダメだ——こいつと関わっちゃいけない。

相手の懐かどころにグイグイ入つてくるタイプの人間は、俺にとつて最も危険だ。

「別に、友達を作らないことが間違いつてわけじゃないだろ。おまえには理解できないかもしれないが、世の中には一人で気楽に生きていきたい奴だつているつてだけの話だ。俺に言わせりや積極的に友達を作ろうとしてるおまえの方がどうかしてる」

どうせなら嫌われた方が手っ取り早い。

お一人様理論にはやや反するが、こいつはイレギュラーすぎる。

「話の腰を折つて悪いが、本題に入りたい」

もう早急に終わらせて、この場を離れるべきだ。

「月夜野さんがどうのつて言つたが、聞きたいことはなんだ？」

話の主導権を握られる前に——そう思い、こちらから踏み込む。

だが戸祭は、真面目な俺をかわすように笑顔で答える。

「まあまあ、そう慌てないの。わたし、お楽しみと好きなおかずは最後に取つておくタイプな

んだ。それにわたしの聞きたかったことの答え、実はもうわかつてんんだー」
もうわかつてる?

「とりあえずさ、もうちょっと買い物に付き合つてよ。ここは奢るからさ」「
はあ!? まだ買い物するつもりか!?!」

「あと一つ行つてないお店があるの。そこで最後だから」
その言葉にホッとする。

それが終わつたら、いい加減さつさと本題だ。

「わかつた。次で最後だからな。なんの店だ?」

「下着ショップ——」

「ぶはつ——」

思わず咽むせてコーヒーを吹き出す。

「なに言つてんだおまえは!」

「よーし。じゃあ行こつか♪」

「ちょっと待て!」

店を出る戸祭の後を、慌てて荷物を抱えて追い駆ける。

すると戸祭は俺から荷物を半分奪い、空いた俺の腕に自分の腕を絡めてきた。
「なにしてんだ!」

「荷物が多いから半分持つてあげたの」

「そうじゃなくて、荷物を持つ反対の手だ！ なにナチュラルに腕組んでんだよ！」

「はあーい。レツツゴー！」

嫌がる俺を引つ張つて歩き出す。

あまりの強引さに、もうなにを言つても無駄だと悟つた。

「お、おおう……」

やつてきたのは通称、男子禁制秘密の花園。またの名は侵入不可のラストリゾート。

目の前に広がる綺麗に陳列されたカラフルな布を前に、思わず変な声が出てしまつた。

普通の男子高校生がこの手の店に来ることはありえない。

せいぜい遠目に眺めるか、横目でチラ見しながら夜のおかずにするくらい。

もしも来られる奴がいるとしたら、よっぽどの勇者か特殊性癖の変態か、はたまた彼女という名の通行証をもつリア充だけ。つまり大半の男にとつて異世界のようなもの。

それでも来たい奴は転生後にも期待して死ぬしかない。

それなのに、なぜ俺は学校一の美少女と下着ショップに来ているんだろうか……？

「なにほーつとしてんの？ さ、行こ！」

「ちょっと用事を思い出した——」

「わかりやすい嘘を吐かないの——」

「待て待て！ 男が一緒なんておかしいだろ！」

やめて！ 僕の孤独耐性はもうゼロよ！

心の叫びが通じるはずもなく無理やり中へ連行される。

一步足を踏み入れると、そこは三百六十度に臨むカラフルな下着の森だった。あまりの色の多さに目がちがちかする。様々な柄とデザイン、おまけにセクシーなベビードールまで。

ダメだ、とてもじゃないが平静を保っていられない。

店員さんや他の女性客の冷たい視線が突き刺さる。

『あらあら、仲がいいことね』『最近の高校生つてずいぶんませてること』『彼氏の好みの下着を買ってあげるのかしら？』『カッフルでくるとかリア充死ね。百回死ね』

生暖かい声と嫉妬に満ちた声があちこちで湧き上がる。

やつぱ無理！ 戸祭を無理やりでも振り払って逃げるしかない！

『泉ヶ丘君の好みってどんな感じのやつ？』

『…………はい？』

まさかの質問をぶっこまれた。

「いや……そんなことを聞かれてもだな……」

もちろん俺とて健全な男子高校生。

女性の下着の好みくらいは……ある。

一言でいうのならレースの紐パン、色はピンク。できればレースは白であつて欲しい。淡いピンクの生地と白レースのコントラストを想像するだけで朝まで眠れない。まさか答えるわけにもいかず、返答に困っている時だつた。

「あら？ 戸祭さんに……泉ヶ丘君？」

聞きなれた声に、背筋が凍つた。

「ま、まさか……」

何度も聞いているその声の主が誰かなんて、間違えるはずもない。冷や汗をかきながら壊れたブリキの口ボットよろしく振り返ると。

「あれー？ 月夜野さんじゃーん♪」

そこには引きつった笑顔を浮かべる朱莉の姿があつた。

空気が死んだ。たぶん俺も、もうすぐ死ぬ。

終わつた……俺はそつと考えるのをやめた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「ホントにねー！ 月夜野さんもお買い物？」

「うん。戸祭さんは泉ヶ丘君と二人できたの？」

「そうだよ。今日はデートなんだー！」

「違う！ 断じてデートではない！」

「今日は天気もいいし、絶好のデート日和だね」

「うん♪」

朱莉は俺の方を見向きもせずに、戸祭と会話を続ける。

あれだ、おまえの話は聞いていないモード。

「ところでここ、下着ショップだよね。私の聞き間違いだつたら申し訳ないんだけど、泉ヶ丘

君に下着の好みを聞いてなかつた？ もしかして二人つてそういう関係なのかな？」

「聞いてたよ。関係については——これから次第だよね♪」

「俺に同意を求めるな！ そんな未来は断じてない！」

「照れないでよー！」

「照れてないわ！」

なにかがぶち切れるような音が聞こえた気がした。

目を向けると、なぜか朱莉は怒っているようで笑顔で目尻をピクピクさせている。

戸祭はそんな朱莉を見ながら必死に笑いを堪えていたようだつた。

「こいつ……わざとやつてやがる。

「そんなわけだから月夜野さん、またね」

「待つて、よかつたら三人で一緒にお買い物でも——」

朱莉がそこまで言いかけて、戸祭は一蹴する。

「デートだから空気読んでくれる？　お買い物はまた今度行こーね♪」
戸祭は笑顔でそう告げ、俺と腕を組んでショップの奥へと足を進める。
去り際に見た朱莉からは、言葉で形容しがたい負のオーラが出ていた。
すまん朱莉。後で事情を……話せるかこれ……？

「じゃあ話の続きをけど、泉ヶ丘君の好きな下着の色ってなに？」

「はあ!?　それまだ続いてんの!?」

「あつたりまえじやん。あんなこと冗談じや聞かないでしょ？」

「本気でも聞くなあんなこと！」

「えーなんですよ。意地悪しないで教えてよ。参考までにさ♪」

こいつマジで大丈夫か？

普通クラスメイトの男に下着の好みとか聞くか？

断固拒否しようとしたが、すんでのところで踏みとどまつた。

いや待て……もしかしたら、女子が男に下着の好みを聞くのは普通のことなんだろうか？

そういえば先日、朱莉との買い物の時も部屋着の好みを聞かれたな。

しばらく友達を作つていない俺には、今どきの友達付き合いってのがわからない。人付き合

いにおいて、俺の常識は他人にとつて非常識な可能性がある。むしろその可能性の方がはるかに高い。

だとしたら、男の好みを参考に女子が衣類を選ぶというのは普通なのでは？

だとしたらだとしたら、俺は女子の下着の好みを口にしても許される？

俺が一人で過ごしているうちに、なんてエロに寛容な時代になつたんだ！

「早く答えないと、今日のことクラスメイトに話しちゃおつかなー」

「おまつ……」

こいつ……今度は脅しできやがった。

わかつた。そこまで言うなら答えてやろうじゃないか。

俺は今、下着の森の中心で好みを叫ぶ！

「レースの紐パン……色はピンク。できればレース部分が白だとありがたい……」

独り言よりもはるかに小声で囁いた。

「白レースで紐でピンクだね。なるほど♪♪」

学校一の美少女に下着の好みをカミングアウトするという、人生最大の羞恥プレイ。男の一生の中で、これほどまでに恥ずかしさを感じることがあるだろうか？
周りの視線がそろそろ限界。いつそ今すぐ消えてなくなりたい。

「ずばり泉ヶ丘君の好みはこれだ！」

「——!?

気持ちとは裏腹に、全力で反応してしまい顔を上げる。

戸祭の手には、確かに白レースで紐でピンクな下着のセットが掲げられていた。ああ……なんて好みのど真ん中なんだろうか。デザイナーさんありがとう。

「ちょっと試着してくるね。あ、でもこれカップ数が違うや」

おもむろに下着セットを戻し、別のカップ数を手にする。

Eカップ……ですか。

「行つてくるから、ここで待つてて」

「待つてくれ！ こんなところで一人にしないでくれ！」

下着ショップで男が一人待つとかもはや拷問だろ！

思わず戸祭にすがりつく。

「そんな怯えなくとも大丈夫よ。他の下着でも見てて」

「無理だ！ 頼むから一人にしないでくれ！ なんでもするから！」

「お座り！」

「俺はおまえのペットじゃねえ！」

そんな訴えもむなしく、戸祭は試着室へと消えて行つた。

絶望的な気分を味わいながら戸祭を待つこと十分。

「え——うおっ!?

不意に腕を掴まれたかと思うと、思いつきり引っ張られた。
その後、俺の両目がなにかでふさがれる。

『大きな声出すとバレちゃうぞーッ』

戸祭の声が耳元で聞こえた瞬間、なにが起きたか悟った。
こいつ俺を試着室に引つ張り込んで両目を手でふさぎやがった!?

『おまえなにしてんだ!』

『一人にしないでって子犬みたいな顔ですがるから』

俺たちは小声で言い合う。

『だからって一緒に入れろって意味じゃねえよ!』

『せつかくだから、似合ってるか見てもらおうと思つてanax

な、なんだと……?』

ということは、俺の後ろにはさつきの下着を身に着けた戸祭が立っているのか?

白レースで紐でピンクの下着を着けた戸祭が!?

『見たい? 見たかつたら振り返つていいよ……』

戸祭は優しく咳^{ツブヤ}き、目を^{おお}覆つていた手をそつと離す。

マジか? いいのか? いやだめだ! 耐えるんだ俺!

そんな理性と煩惱の葛藤も虚しく、戸祭があの下着を着けていると想像するだけで俺の中の天使と悪魔がハルマゲドンを開戦。秒で天使は白旗を揚げ、全面降伏してしまった。

理性が敗北した俺は、ゆっくりと振り返り——。

次の瞬間、絶望した。

「さんねーん。もう服着ちやつたあ♪」

そこにはすでに試着を終えた戸祭が、憎たらしい笑顔で笑いを堪えていた。

……もうこいつ殴っていい?

殴つても許されるだろ、なあ全国の男子諸君。

「さて、サイズもバツチリだったからこれ買おつと♪」

「…………」

試着室を無言で出た俺の耳元で戸祭がささやく。

「期待しちゃつた?」

「してねえよ!」

間髪入れずに言い放つ。

クツソ……全てを見透かしたような目で見やがつて。

とはいっても、否定できないのだから悔しくても言い返せない。

俺は戸祭の後ろで小さくなりながら、会計を待つたのだった。



● Author ●
柚本悠斗

● Illustration ●
桜木蓮

ie ni kaeru to
kanjou ga
konarazu nandika
shiteimousu

GA文庫

『家に帰るとカノジョがナニかしています』の試読版はここまでです。
お読みいただきましてありがとうございました。

続きは5月15日頃発売の製品版でお楽しみください！

※この試読版は製作中のものであり、製品版と一部異なる場合があります。